

---

# 運命邂逅

撲殺天使

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

運命邂逅

### 【Nコード】

N1407N

### 【作者名】

撲殺天使

### 【あらすじ】

後悔したまま死ぬ事になった少年がFATEの世界に引き込まれる。

世界が違えど生きている弟が、少年を強迫観念にも似た感情へと突き動かす。

## 異界共鳴（前書き）

修正だけでは足りず、始めから書き直す事になりました。それにしても何度もタイトルを変えてしまい、重ねがさね申し訳ありませんでした。

多分もう変わる事はないと思います。（2011・4・24投稿）

アンリの口調がおかしく感じるかもしれません。

## 異界共鳴

毎日の淡々とした日々。変わらない日常。享受する平和。平凡な生活。

そんな日常は簡単に崩壊した。

ある日突然強盗犯に家族を殺され、生き残った学生の身分の俺は親戚に引き取られたのだ。あまりにも現実味のない出来事のせいか最近の記憶が朧気だが。

日常生活に戻ってから信じられず、怠惰な日々を無駄に消費した。尤も、そんな風にだらけた日々を過ごしていたからか、ある日事故であっさり死んだ。

「いやいやいや、なんでだよ」

死んだら普通話すら出来ない。

しかし今俺は声が出るし思考出来る。

「え、何それ怖い。つつかおかしい。おかしいよな。俺、死んだよね。滅茶苦茶痛かったもん。それともついに頭の方がおかしくなっただとか？なんか自分で言つてて悲しいんだけど」

しかも周囲が不気味だ。静かすぎる。何より何処までもつづく闇が恐ろしい。

もし精神病棟の病室だったら白い筈だ。

「それともアレか？夢か？夢なのか？」

訳が分からない。

暗闇の中を色のついた人間がポツンと1人。

「……………」

ショックだ。こんな訳の分からない夢か若しくは精神疾患が見せる幻なのか知らないが、自分は相当重傷だったらしい。主に頭の方だが。

漸く事態の異常性を実感し始めた。

「目を覚ますんだ俺。起きるんだ俺。明日はジャンプの発売日だ。このままじゃ買いにいけないよ。それだけが唯一残された生きが이었다筈だ。いや待て。それでいいのか俺の人生」

「…おまえ、意外と冷静だな」

今までの人生を思い返し唸る俺へ返事を期待した訳じゃない。だが自分以外の人間が現れた事に気がついたら無視は出来ない。

「あんた、誰だよ」

突如出現した存在への問いは当然の事。

これ以上の非現実じみた現象がおきない事をねがうばかりだ。生憎と夢だからなのか幻だからなのか、精神的な疲れはかんじないのが救いだ。

認識したその少年をまじまじと観察する。見た事があるような気がするのだが気のせいかな。

「面白みのねえ奴」

少年は反応の薄い俺が不満らしい。大袈裟に驚愕でもすれば満足なのか。既に十分驚いた気がするのだが。

「あんだ、何なんだよ。失礼な奴だな。つうか俺の夢に勝手に出演してんじゃねえよ」

少年は不信を露わにする俺へとこれ見よがしな溜息を吐く。

「おいおいマジデスカ。テメエが死んだ事にも気づいてねえのかよ、夢じゃねえっての」

目を見開く俺の様子に見ず知らずの少年は呆れ果てる。ついでの確信を突くような事まで言って除けた。

まあしかし、これで俺の疑問は1つだけハッキリした訳だ。薄々気づいてはいたが。

「やつぱ死んでんのか。じゃあ此処って、死後の世界なのか？」

別段死んだ事が感慨深い訳じゃない。想像以上に虚しくはあったが。死んだ後の事など考えていないのが普通だ。

「ホント面白くねえ奴だな。普通もつと驚くもんじゃね？」

「んなこたいい。それよかあんだ誰だつて。神様とか言わないよな」

たしかに、正義の味方の殻を被った神モドキに似た少年だが。

その辺の推測は外れてほしいものだ。いくら現実離れた現象が次々発生しようと、2次元の人物がリアルに出現するのはやめてほしい。

「おつ、いい線いつてんじゃん。つかもう気づてんのかと思っただぜ」「いや、分かつてはいるんだ。アンリ・マユだよな。なんか突っ込んだ方がいいのか？」

この世の全ての悪だっアンリ・マユたか。

Fateシリーズの言峰とギルガメッシュに次ぐラスボス的存在。  
死後にそんなものが眼前に現れたとなれば、本格的に現実逃避したくなるのも仕方ない。

「そ、オレアこの世の全ての悪。アンリ・マユ」

ついに本人宣言がくだされた。

正直本人か本人じゃないかなどと言った事は重要じゃない。最早何がおころうが、動じない自信がある。

「その悪心殿が俺に何の用だ」

「そう急かすなつて。順に説明してやる。めんどくせえけど」

本心から面倒臭さを全面に出すアンリ。

普段の俺だったなら不愉快に思った態度を今回ばかりは完璧にスル  
ーしてやる。

「まず此処は聖杯の中。オーケー？」

「聖杯だと？」

これ以上驚く事はないと思っていた。だがこの場合アンリ・マユが  
いる理由としては、納得のいく説明かもしれない。

「言つとくが、オレがおまえの魂を喚びこんだ訳じゃねえかな」

「魂……？」

「あー、死んでんだし生身な訳ねえじゃん」

「言われてみれば……」

今更気づいた。感触や感覚が無い。  
今の俺は霊体みたいな存在らしい。

「リアクションうつすいなー」

「いや、もう十分驚いたしな」

「ま、いつか。んで、おまえを喚んだのは平行世界のおまえだよ。  
厳密にいうと違うのかねえ……ま、似たようなもんだな」

聖杯。平行世界。魂。

聖杯があるのだからこの世界はFate世界なのかもしれない。  
信じられないが信じられない事が既におこった後だ。最早信じない  
訳にはいかない。

「その平行世界のおまえが聖杯に願ったのがそもそもの原因  
だ」

……。

迷惑な話だが元凶は自分自身らしい。

此処まで聞くと与太話とは思わないけれど。複雑な心境だ。

「でも、あんたが中にいるなら願いは破壊の形でしか叶えられねえ  
んじゃないのか？」

「いやいや、んなこたアねえよ。実際おまえは此処にいるじゃねえ  
か。つつても、破壊した聖杯の欠片をただの一般人が触っちゃまった  
ア思わなかったがな。ケケケ」

「ハア！？」

「いや、オレも驚いたんだぜ。だが事実は事実だ。その時点で願い  
は受諾された。ま、その代償が安い訳ないよなア？」

アンリ・マユは俺の驚愕を面白がるようにニヤニヤと笑いやがる。



とはいえ、俺はそんなものに構っている余裕はない。  
つづく言葉の方に衝撃を受けた。

「肝心のソイツさー、死んじまってやんの」

笑えんなー、と腹を抱え爆笑。なんとも不愉快な笑い声だ。

だが俺は顔を顰める程度に留める。悪の容認者に注意するだけ無駄な事だ。

話はだいたい分かった。

「つまり、俺は代役って訳か？」

「早い話がな。この世界のお前が聖杯に願った時軸とお前が死んだ時軸と重なったみてえだ。たぶん聖杯に魂が引つ張られたんだろうな。この世界のおまえの魂は消滅したみてえだしよ」

簡単にいうが、平行世界の俺と死ぬ時軸が重なる確率がどのくらいだかたしかめようがない。

このまま第2の人生を歩めとでも言いたいのか。だとしたら冗談じゃない。

「どちらにしろ、平行世界の「俺」の事なんざ知るかよ。少なくともゲームの世界なんかで生きていきたくないね」

「へえ。まあ確かにおまえの言い分は分からなくもねえけどな。此処も一応、現実だ。どっちみちおまえの願いを叶えるにはおまえが必要なんだよ」

「俺の、願い…？」

「ヒヒ、この世界の「おまえ」とおまえ自身が不可分な訳ねえだろ。死んだ時間云々の話は嘘じゃねえが、何かしら惹かれる要因があった筈だぜ。ま、せいぜい足掻いてくれや！じゃあな」

「まッ!？」

用は済んだとばかりに遠のくアンリ・マユへ咄嗟に伸ばした手が宙を空振る。

いつのまにか、意識と共に体は闇の中に溶け込んだ。

## 煉獄同調

血臭を満たした室内に恐怖を覚える。血の海の中から弟が救いを求め、懸命に手を伸ばした。

その時の弟は誰が見ても虫の息だった。現に、そのあまりにも惨たらしい惨状から、思わず後退りしてしまったのは俺。

あの時、その手を掴んでいれば何か変わっていたのかもしれない。そんな風に、過ぎ去った出来事を不毛にも延々と後悔した。

……

……

…

始めに訪れたのは不快な落下感。それはまるで、乗り物に酔ったような感覚だった。

自分の状態を知るために体を動かそうにも全身の激痛が酷い。それはその筈。つい先刻まで、この体は魂の無い肉体だったのだ。これは所謂死後硬直なのかもしれない。

仕方無く、地べたを這った状態らしい俺は起き上がるのを諦めた。ひとまず鼻につく臭いに顔をしかめ、状況を把握するために目を開く。

「ツツ!？」

視界に入った光景を目にすると、知りたかった自身の状態を予想以上に察する事が出来た。

理解したと同時に、すぐに堪え難い壮絶な光景から目を逸らす。

「ぐ  
」

込みあげてくる嘔吐感を堪えたぶん、息が荒くなった。その光景は、俺のいた現実以上にやけに現実感のあるものだったからだ。

そう、乾いた瞳に写るのは灼熱の炎が人を焼く様子。臭覚、聴覚を狂わしたのは悲鳴、懇願、哀願の、ヒトの、声声。

「なん、だ、これ」

喉が引きつる。

やっと出た咳きは掠れていた。だがしかし、これはあまりに不愉快な目覚めだ。

このまま不快な風景から目を瞑り、身を委ねれば、容易く俺は2度目の生を終わらせる事が出来るだろうが、そんな事をする訳にもいかない。

元々同一存在だった事も手伝い、この体の主の記憶が融合し現状を教えてくれた。恐らく、この時に、俺は「俺」に成ったんだ。

「そうだ。こんな事してる場合じゃねえ」

無理矢理体を動かしてみれば、痛みはないが、ぎしぎしと身体中が悲鳴を上げる。ただ少し体を動かすだけでわずかに残った体力が、大袈裟なほど削られる。

「クソッ」

その状態を省みれば分かる。俺がこのまま此処に留まったとしても死ぬだけなんだと…。

「アイツが生きてんの確認しなきゃ死にきれねえつつの」

俺はぐっ、と膝に力をいれ、立ち上がると、忌々しい漆黒の太陽を睨みつけた。

禍々しい太陽は、間違いなく第4次聖杯戦争がおこった証。何より、アンリ・マユが生み出されかけた痕跡が空に浮かんで見える。

「あんの野郎、状況説明くらいしろってんだ。ふざけやがって…」

憑依先の説明くらいして欲しい。

これは想像に難くない事だが、今頃この様子を嗤いながら眺めているのかもしれないのだ。恨めしく思わない訳がない。

思うように動かない体に苛立つ。こんな事をしている間にも時間が経過し焦りが生まれる。

記憶が確かならば、聖杯の欠片に触れた直後は「俺」が気絶した幼い弟を背負っていたのだ。だがその弟は今、俺の目の届く範囲にはいない。

「クソッ、何処にいるんだ！？ 土郎ッ！」

呼び掛けてみるが、勿論返答はない。ただ、燃えさかる火炎が音をたて、バチバチと身を踊らせるだけだ。

「お願いだ！ いたら返事をしてくれ！」

徐々に歩ける程度にはなったものの、焦りは増すばかり。幼い少年

がそれ程遠くへ行けるとは思えないから、尚更焦る。  
もしかしたらあのまま火炎に焼かれたのかもしれない。そんなイヤな想像が過ぎってしまう。

「ふ、ハツ、ハア、流石に、息が苦しくなっ てきやがった」

それも当然か。炎に囲まれ、脱水症状寸前。加え、これだけ動き回れば仕方のない事だ。

まあだからこそ弟が心配なのだが。

「あー、これはやべえかもな。…と、ん？」

本格的に命の危機をかんじ始めたその時。

「……雨？」

ポツリ、ポツリ。

頬を濡らす感触に足を止める。驚くべき事に都合良く雨が降ってきた。

測ったかのような雨に眉を寄せる。

だが炎が消え、思っていた以上に視界が広がったおかげか、捜し人はすんなりと見つかった。

「し、」

突然の事に目を見開いた。

咄嗟に呼び掛けようとするまえに、危なっかしくふらふらと歩く少年のうつろな瞳が此方に向けられる。

その瞬間、少年の体が傾いた。

「士郎!!」

そこで漸く俺は「俺」の弟の名を叫び、弟の下へ駆け出した。弟、士郎を倒れる寸前に支える。

「だれ？」

「おまえは、俺が分らないのか？」

辛うじて意識を保っている士郎が頷いた。

今にも軽すぎる体の重みが失われそうな雰囲気纏っている。そのせいか無意識に士郎を支える手に力が籠もった。そうでもないと不安に押し潰されそうになる。自分はまた後悔する事になるんじゃないか。

「、う」

「あ、悪い。痛かったか？」

士郎の顔が苦痛から歪んだ。しかし、氣遣いから力を抜いた俺へと士郎が手を伸ばした。

「な、んだ？」

「かなしい、の？」

「え？」

悲しいのかと問うてくるその瞳の方が余程痛々しい哀しみを宿していた。もしかせずとも、士郎が苦しげなのは自分のせいなのか。自分が悲しませているのか。

ボンヤリと理解した俺は再び悲しみに暮れる。

「……おまえは人の心配より自分の心配だけしていればいい」

やるせない。

今の土郎の記憶は完全な空白状態。死への恐怖はないのかもしれない。

いや、それくらいの自意識はあるのかもしれないが、土郎の場合優先すべき順位が自分じゃない、他人なのだ。

「うん」

土郎は俺の言葉を聞き、微笑んだ。その笑みが俺を息苦しくさせる猛毒とも知らず。

かんじる必要のない罪悪感が胸をざわつかせた。

アンリ・マユが言った「俺」じゃない俺の願いが分かった気がする。この世界の「俺」の願いが「土郎に生きていて欲しい」事だとしたら、俺の願いはこの罪悪感（後悔）から救われる事だ。だから、彼のために生きるのは悪くないと思った。



## 煉獄同調（後書き）

今回のお話の補足。

弟を見殺しにしたと思い込んだ罪悪感が、ある種のトラウマとして植えつけられ、FATE世界の士郎を見殺しにした弟とだぶらせたま、自分の世界の弟に出来ない贖罪を士郎にしたい、守りたいという強い強迫観念が主人公の中に生まれました。

分かり難いかもしれないから補足しました。

## 新世開幕

覚醒後の世界は変わっていた。

月姫の志貴もこんな気分だったのかもしれない。俺の「眼」に視える世界は、たしかに壊れかけた世界だ。その事実が何を意味するのか、そんなものは理解したくも無かった。だが分かってしまったものは仕方がない。

「…直死の魔眼？」

俺もこれには茫然とするしか無かった。

何せ、今の俺から視れば、この世界は容易に壊れ易いものに視えるのだ。原作を知らなければ、頭がおかしくなったのかと自分を疑ったとしても不思議はない。

あの後、原作同様衛宮切嗣に助けられ、現在の状況を顧みるに此处は病室らしい。白い病室の其処彼処に生命線のような「線」と「点」が視える。

「なんか、気味悪い」

死の後遺症みたいなものなのかもしれない。嬉しくない奇跡がおこってしまった。迷惑な事だ。

こんな代物は危険以外の何ものでもない。固有結界保持者が身内にいるだけでも厄介なのだ。魔術師や教会に知られてしまったが最後、最悪狙われるだけじゃすまない。

「…なんだ？」

溜息を吐く所か、逃げ出したい衝動に搔られたが、視界は前触れも

なく正常に戻った。

唐突な変化についていけず瞬きを繰り返す。

「おいおい。いったい何なんだよ」

「あ、お兄ちゃん。もう起きてもだいじょうぶなのか？」

訝しげに首を傾げる俺に覚えのある声が掛かる。

「士郎！」

「へ？わわ！？」

隣のベッドから上体をおこした士郎に飛びつく。俺の行動が予想外だったのか士郎は戸惑いを露にした。

騒がしい俺達の様子に興味を惹かれた同室の子供達の注目を集める。そんな周囲に気づいた俺は苦笑した。

「あ、いや、悪い悪い。つい」

「う、うん。べつにいいけど。目が覚めたんならお医者さん呼んだ方がいいんじゃないか？」

「ああ。その前に聞きたいんだがあれからどれくらいたったんだ？」

「2日だよ。おれも少し前に目が覚めたばっかなんだ」

外傷といえば、頭と手足に包帯が巻かれているくらいだ。多少の火傷は致し方ないだろう。意識しだしたせいか少しばかり頭がズキズキする。

士郎も俺と似たようなものだが、2日しかたっていないにも関わらず、やけに元気だ。

「まあそんなもんか。つつかおまえはもう大丈夫なのか？」

「おれ？」

「おまえ、下手したら俺より重傷だったと思っただが…」  
「ふうん？」

目を丸くする士郎に納得した。

元々士郎が助かったのは理想郷アヴァロンが埋め込まれたからだ。  
あの聖遺物が並みの回復力な訳が無かった。

「ま、その事は今はいいか。それよりその様子じゃ俺の事は全然覚えてないみたいだな」

「え…覚えてるよ？お兄ちゃんが俺を助けてくれたんでしょ？」

「いや、あの大火災より前の記憶の事だ」

「あ……。えと、あの、もしかしておれと知り合いだったのか？」

士郎が申し訳なさそうに眉尻を下げた。

「知り合いつつつか、なんつつか…」

兄弟だったんだが。

あまり期待をしていた訳じゃないが、本人に訊かれるのも意外と複雑なものだ。

言葉を濁した俺を士郎が不安げに見つめる。勿体つけた態度が不安を煽ったらしい。

「あの？」

「いや、悪い。まずは自己紹介からだよな。俺はタ士。よろしくな」

「あ、ああ。おれは士郎。お兄ちゃんは知っているみたいだけど」

戸惑いは拭いきれていない答えだった。まあとはいえ、不信がられるよりは幾分かましか。

初見じゃない事が幸いしたのか士郎の態度は随分気易い。あんな事

があつたばかりな上に記憶まで失つた人間だとは思えない程だ。

これは俺が影響を与えたせいかな。それは分からないが、これ以上混乱させるような事を告げるべきか悩む。

「あー、士郎。あのな、実は…」  
「分かった!」

歯切れ悪く口籠もる俺の言葉を士郎の明るい声に遮られた。  
タイミングがいいのか悪いのか分からない。

「お兄ちゃんはお兄ちゃんなんだな?」  
「…は?」

目を点にする俺の反応がいけないのか士郎が不満げに唇を尖らせる。  
何の脈絡無くそんな事を言われても困る。

「だから、もしかしたらなんだけど。おれとお兄ちゃんが兄弟なん  
じゃないかと思ったんだ」  
「士郎、おまえ…」

驚いた。

士郎は俺の躊躇をもともせず、自ら気づいたのだ。

「な、何故そんな風に思うんだ?」  
「いや、だって、あの時おれのなまえを必至に呼んでただろ?」  
「え、あ、ああ。まあな」

たしかに、あの時は必至だった。  
平行世界の「俺」の過去がこの世界の俺とだぶった所為もあるけれど。

「あんなに必至だったから、だな。やっぱ。おれ、凄く嬉しかった。お兄ちゃんが来てくれた時、なんか安心したっていうか……。でも、お兄ちゃんとは友達ってかんじじゃ無かったし、それじゃあ家族かなと思って……。違ったか？」

全部勘だけで其処まで推測したのか。子供にしては大したものだ。実際正しかった。

内心の動揺が漏れたのか、はにかんだ士郎の微笑みが俺を氣遣ったように見えたのは、多分気のせいじゃない。

俺は「衛宮士郎」の片鱗を目のあたりにし、口唇が戦慄いた。

この「士郎」に「正義の味方」を指すキツカケを与えたのは俺なのかもしれない……。

## 新世開幕（後書き）

今回のことで、兄さんは更に士郎を守らなければならないと責任（脅迫観念？）を強めました。

こんな兄さんとくつつくヒロインが想像つきません。  
くつつくまでのストーリーも難しそう。

今のところ、ヒロイン候補はイリヤと凜と桜。

## 父子師弟（前書き）

単なる兄やんと切嗣の不毛な会話。  
つか切嗣の口調がよく分からない。



## 父子師弟

朝のぴんと張り詰めた空気が道場内にも浸透する。

だがその空気を破るように俺が間合いへ踏み入れた。そんな俺が攻撃するより早く、先に動いたのは切嗣。

無駄のない動きが俺の胴を捉える。

しかし異常な反射神経のおかげか、脇腹を掠った程度に済んだ。痛みが後からじくじくひろがっていく感覚がなんとも言い難い。

掠った程度なのにこれだけの威力だ。当たればたたじゃ済まない事が分かる。

分かっているも追撃は避けられない。

「っづ！」

予想以上の激痛だ。

無防備な左肩を竹刀が抉った。

危なげによろける足を踏み留める。

まあ始めに比べれば、膝を着かないだけ成長した方だ。これ以上の深追いはしない。

「参った。降参だ」

手を挙げ、その場に座り込んだ。

「お疲れ様」

「ああ、お疲れさん」

タオルを渡され、緊張感から溜めていた息を吐きだした。

雰囲気は幾分柔らかくなった切嗣が父親らしく背を擦ってくれる。

スイッチのON・OFFの切替が出来るのは1流の魔術師の証拠だ。切嗣は魔術使いだが、1流にそんなものは関係ない筈だし。

「だいじょうぶかい？」

「問題ねえ。つつか俺、こんなんでにホントに強くなってるのかよ」

「はは、自分じゃ気づかないものさ。夕土は十分成長してるよ」

「でもさあ……」

俺が魔術指南と戦闘訓練を受けるために漸く切嗣の説得に成功したのが半年前。切嗣に引き取られたのが3年半前。原作に突入するまでに後7年もない。

通常の子供よりは身体能力は異常だが、魔術の才能がない分、焦りは深まるばかり。しかも切嗣とばかり鍛錬しているせいか、強くなった実感があまりない。

「夕土、君は何をそんなに焦っているんだい？」

「やっぱり切嗣には分かるか？」

「そりゃあ僕は君達の父親だからね」

そんなことに胸を張って言い切った切嗣の方が子供みたいだ。なんだか意地悪したくなるじゃないか。

「ふふ。家事全般を子供にやらせる父親ねえ」

「あ、ははは。……面目ない」

「分かればよろしい。俺はだいじょうぶだ」

魔術以外の事には、とことん情けない切嗣に口元を緩めた。

まあ、とはいえ実のところ、その情けない父が魔術指導を頑なに嫌がったがため、最終手段に「俺の眼」の事を洩々明かす事になった訳だが。

「もしかして、原因はその「眼」かい？」

答をはぐらかしたつもりだったが、切嗣の方にそんなものは通用しないし、はぐらかされるつもりも全くないらしい。

たしかにこの「眼」があるのは何かと不便なこともある。ふとした時に唐突に「死」を眼にしてみうがあるくらいだ。

ただ、聖杯からのバックアップのおかげか、原作における直死の魔眼の使い手たる遠野志貴や両儀式らと違い、「死」を視る時の切替が可能なのは有難い。

正直、恐くないといえば嘘になる。当然、切嗣にも士郎と自分以外には絶対誰にも言わないように言われている。魔術教会や協会に知られる訳にいかないから。

「なんで、そう思ったワケ？」

「人は恐怖から力を求める事もある」

「違いよ。そんなんじゃない。恐いっつうのはたしかにあるがな」

やはり聖杯戦争の事は言えない。連鎖的に、何故知っているのかを言わなければいけない。なるべく俺はそれをしたくはない。

魔術や魔法が存在する世界なのだ、真剣に説明すれば切嗣なら俺の境遇を信じてくれるかもしれないが。呪いに侵されつづける切嗣に、これ以上負担をかけたくはない。

「じゃあ、他に思い当たる事と言ったら、士郎に関係した事かな」

「」

咄嗟に口にする言葉が思いつかない。

恐らく凶星だったからだろう。俺は観念して、諦めの溜息を吐いた。

「やっぱり、切嗣には適わないな。そうさ。俺は士郎が心配なんだよ」

「夕士が何か悩んでる時はだいたいが士郎の事だから。僕は君には他の事にももつと目を向けて欲しいんだけどね」

「いや、こればかりは無理だな」

自分がかかり過保護な自覚はある。既に性分とすら言えるかもしれない。士郎からしたら鬱陶しい事かもしれないが。やはり士郎の未来を考えると心配事がたえない。

士郎は勿論のこと、俺も面倒事ばかりを抱えている身の上。だからこそ、士郎を守るためには俺自身をも守り通せる程の力が必要なのだ。

それ故に焦ってしまうのは仕方のない事だ。

「士郎の何が心配なんだい？あの子は年の割にはしっかりしているよ。君とおなじでね」

「そんな事は俺だって分かってる。俺が心配してる理由なんか言わなくても分かってんだろ」

切嗣の誤魔化した物言いに眉根を寄せる。

声には少しばかり剣呑な響きが混じった。切嗣は渋面を浮かべた俺に苦笑する。

「魔術を教えた事なら悪かったよ。でも、「夕兄に教えておれに教えないのは不公平だ！」なんて言われちゃったからね。僕も強くは断れないさ」

「まあ分かつてはいるんだけどな」

そう、理解してはいるのだ。正直、俺は士郎が魔術を知る事にもあつかう事にも反対だった。

だがアヴァロンが埋め込まれた以上、魔術と無関係のままでいる方が難しい。何も知らない方が危険な事が多い。

「俺なんか伝説級の代物を持っている上に士郎の魔術は異端だ。尚更心配なんだよ」

調べた結果、士郎の属性は原作同様の「剣」。

伝説級の魔眼持ちの俺もだが、魔術師に狙われても不思議じゃない。それも魔法に最も近い魔術といわれる固有結界の持ち主だ。

魔術を全く知らぬまま暮らすのも1つの選択だったのだが。これは俺の個人的な願いにすぎない。

「俺は士郎を守るくらい強くなりたいんだ」

「そっか。だけど、無理をする事と頑張る事はちがうよ？」

「ん。なんか悪い。俺の方が心配かけちまつてるよな。気をつける」「そうしてくれると助かるな。焦っても疲れるだけだよ」

ポンポンと幼い子供をあやすように頭を撫でられる。そんな切嗣に悪戯を思いついた子供の笑顔で言った。

「でも、兄貴は弟を守るもんだろ？」

それだけは譲れない。

## 父子師弟（後書き）

兄やんの土郎病は止まらない。基本的に土郎が基準の生活。土郎以外  
の事には無頓着なんです。

切嗣の事を蔑ろにしている訳じゃないですよ。一応尊敬も感謝もし  
てますよ。

あ、兄やんの魔術の才能については土郎よりちよつとましな程度。  
まあ無敵？の眼があるし才能がちよつとないくらい良いよね。  
多分最強じゃないし。

## 桜花乱舞

「夕兄。電気代節約のために外に遊びに行くぞ」

そんな事をのたまった士郎の発言に啞然した。

我が家の家計に力をいれるのはいい事だ。切嗣はお金に無頓着なところがあるのだし俺達がしっかりしなければいけないのは分かる。

しかし、こんな真夏日に外出する必要性があるのか謎だ。電気を使わずに屋内ですごせばいいじゃないか。

「正気か？」

啞然した俺はつい真顔で訊ねていた。神妙に頷いた士郎の様子に、これ以上追求するのも馬鹿馬鹿しくなった。

観念した俺が仕方無く付き合わされたのは炎天下の公園。その公園は述べるまでもなく凄まじく暑かった。

「蒸れる。暑い。死ぬ。帰りたい」

「夕兄煩いぞ。来たばかりなんだから帰る訳ないだろ」

途端つらつらと並べた単語を士郎に切り捨てられた。

最早、この暑さをひきおこす太陽しか恨める対象はいない。

「夕兄！ブランコしようぜ！」

だがそんな鬱々とした俺の気持ちは士郎に届く筈もなく。はしゃぐ士郎に手を引かれる。

暑い中辟易すれど士郎の言葉を聞き入れない訳にはいかない。

「分かった、分かったから引つ張んな」  
「早くー」

幸いといえはいいのかはべつとして、公園に子供はいない。日陰で子連れの奥様方がお喋りしているぐらいだ。

この暑さじゃ遊ばない方が賢明だが。士郎は公園を貸切にした気分なのかやけに嬉しそうだ。

「兄さん！待ってください！」  
「ついてくんなよ！」

とはいえ、本当に貸切った訳じゃない。  
見知らぬ兄妹が公園に乱入する可能性も少なからずある。

「待ってください！兄さんまで、わたしを置いていかないで！」

しかも、何やら兄妹で痴話喧嘩のような会話を繰りひろげ始めた。  
既に「兄を健気に追いかける妹」の図が「男に別れを告げられ追い続ける女」にしか見えない。2人に気づいた士郎もきよとした顔でその茶番を眺めている。

「バツ…！違っげえよ！！僕にも少しくらい1人になりたい時があるんだよ。だから、おまえも偶には僕についてくばつかじゃなくて、友達と遊んだりすればいいんだ」

「兄さん……」

しかし思ったより案外昼ドラ風味の感動的な話だったようだ。兄の方が相当不器用な奴らしい。

驚く妹が気に食わないのか兄が照れ隠しに鼻を鳴らし、そそくさと踵を返す。



「わ、分かつたらついてくるな！いいな！？」

「え？兄さん！？」

「あ……」

俺と士郎の目の前を通過した兄を追って来た妹が躓いた。  
やはり目の前で転ばれては手を貸さない訳にはいかない。

「おい。君、だいじょうぶか？」

「ふえ……。だれ？」

渋々手を貸し、近くから見た少女は、全体的に見ても色素の薄い儂げな美少女だった。

涙目の少女に内心おおいに狼狽え、表面上は人好きのする笑みを浮かべ、無理矢理立たせる。

「あ、あのお？」

「怪我はないな？」

「う、え！？え、えと、はい！へいきです！」

助けおこした事に気づいたらしい。暫く瞬かせていた丸い瞳がきらきらと輝く。

少女は花が咲き誇ったように微笑んだ。

「お、おまえ！僕の妹に何してんだよッ！」

見惚れかけた俺を不躑な声が正気に戻した。

少女との間に飛び込んだ少年は、先程去ったと思い込んでいた少女の兄らしかった。その兄が妹を庇うかのように視界を遮る。

「兄さん!？」

「桜。おまえは下がってろよ」

敵愾心を剥き出しにする桜の兄に無実の罪を着せられ威嚇される。誤解も甚だしい行為に流石の桜も口を開いた。

「待つてください兄さん! その人は何も悪くありません! 転んだわたしに手を貸してくれただけですッ」

強引な兄へと気弱な印象の桜が声を荒げる。  
珍しい桜の強気な態度に兄が驚く。

「ハア!？だ、だったら早くそういえよな!！」

「ごめんなさい、兄さん。それに、あなたにもご迷惑をおかけして……」

「べつにそんなに気にしてねえからいいよ。それに俺にも弟がいるから気持ち分かるしな」

苦笑した俺が士郎を見た事に気づいた桜が慌てて会釈する。その様子を模倣した士郎も会釈。

微笑ましい光景に和んだのも束の間。そこへ水を刺す存在を忘れる所だった。

「か、勘違いするなよ!？べつに僕は桜の事を心配した訳じゃないんだからなッ!」

桜の兄らしい少年。

正直な話、男のツンデレなど士郎以外がした所で気色悪いだけだ。整った顔とウェーブがかった髪質にも無駄に腹立たしくなる。

加え、桜のなまえとこの兄の性格にも嫌な予感しかしない。俺は、

すぐにこの場を去らなければいけない気がする。

「分かった分かった。んじゃ君、今度は気をつけるよ。士郎、行くぞ」

「うん。じゃあな」

「あ、おい！」

この際兄の方の呼び声は無視しよう。

このまま関わらずに済んだ事にホッとした。

「あのッ！わたしのなまえは間桐桜です。あなたのおなまえを教えてくださいませんか？」

「桜？」

「……………」

けれども、大声で呼び止められれば足を進める訳にもいかなくなる。そんな自分に呆れる。無視すればいいものを士郎が気にするから出来ず、嫌々ながら振り返った。

結局この出会いも「運命（FATE）の世界」の予定調和に過ぎないものなのかもしれない。

「…衛宮タ士だ」

「お、おれは士郎。衛宮士郎！」

その時が初めてだったかもしれない。否、初めて、「間桐桜」と正面から対峙した。

だからか、余計に自ら名乗ったその声は俺の心情を露にするように不機嫌なものだった。

## 桜花乱舞（後書き）

多分士郎が8才で兄やんが9才くらいの話。  
時系列なんかかんがえていません。

だから前回より前の話が出て来ても気にしたら駄目です。

## 神父甘言

何故だか俺は冬木市に1つしかない中華飯店泰山にいた。正確には言峰綺礼に連れ込まれた。

そもそも、学校の帰宅途中なんかはこの男と遭遇してしまった事が運の尽きだったのだ。俺のステータスには「幸運・E」が表示されること間違いなし。再会した相手がそのくらい会いたくない人物だ。有り得ない事じゃない。

運命は何処までも俺に残酷だ。

「丁度よかった。君とは1度じっくりと話をしてみたいと思っていた」

「俺は話なんかない。帰らせてもらう」

「まあ待て。此処まで来たのだ。私お勧めの麻婆を奢ってやろう」

「結構だ」

「遠慮する事はない」

「遠慮じゃねえよ、腐れ神父が」

無表情に言い放つ。

この男はとことん人が嫌がる事をしたがる。ある意味この男こそが世界の害悪の元凶だとすらいえよう。

まあご覧の通りこの調子なのだ。極力感情を顔に出さない方がいい。顔を顰めたところで、この男を悦ばせるだけで俺が気分を害するだけだ。

「しかし偶然とはいえ、再びおまえとまみえる日が来ようとはな。神に感謝せねばなるまい」

「何が神に感謝だよ。勝手に祈りでもなんでもしてやがれ似非神父」

「そういうな。これも何かの縁だろう」

「笑わせんな。反吐が出んぜ」

そんな縁などこの俺が粉微塵に粉碎してやる。

昔の俺ならこんな怪しい男の話など耳も貸さず本当に家に帰ったかもしれないが。今の俺はこの男の破綻ぶりを知っているが故に話が気にかかる。

癪だが聞くだけ聞いてやる事にする。

「話はなんだ。とつとと用件を言え」

「クク。我慢の効かん奴だ。そのまえに頼みたいものがあれば頼め。私は元々食事のために此処へ寄ったのだ」

「おまえに借りなんぞつくれるか」

吐き捨てた俺を言峰が愉しげに嗤った。相変わらず気味の悪い男だ。こんな男に食事だろうとなんだろうと借りはつくりたくはない。

「あの時教会でも思ったが、君は随分成熟しているようだな。それはあの「大火災」が原因かね」

あの時とは、つまり黄金のサーヴァントの餌となる運命にあった孤児達を助けだした事にあるらしい。まあ10年後に士郎が知ったら必ず罪悪感を抱く事など分かりきっている。そんなものは許容出来ない上に、無視出来ない事だ。この際他の人間が襲われても俺の知った事じゃない。

言峰自身は切嗣のお節介か贖罪だとも考えたかもしれないが。孤児達の引き取り手を考えたのは俺だ。実際、俺の提案を賛成した切嗣にどんな考えがあったのかは詮索しない。

教会へ訪れた機会はその時の1度だけだ。この男は自分を死んだと思っ込んでいた切嗣の動揺を面白がっていた。忌々しい男だ。

未だにこの地の管理者たる「遠坂」にも「衛宮」の事は言っていないようだしつくづく油断ならない。

「ま、ある意味当たってるかもな。あんたら魔術師のくだらねえ諍いなんか無かったら、俺は今ここにいないワケだし」

「フム。衛宮切嗣から真相を聞いたのか。それにしても随分冷静だな。君は私が憎くはないのかね」

意外そうに俺を値踏みする言峰。

言峰の事だ、俺が切嗣の息子だから呼び止め、反応を愉しみたかったのだろう。だが今の俺は思ったような反応が返らないのだ。だからこそ逆に興味深いみたいだが。それも迷惑以外の何ものでもない。

「……すべて、既に終わった事だ」

その声音は常にないくらい冷めなくなる。あまりにくだらないう問いだ。だから余計だ。

しかし言峰は興味が増したのか、玩具を見つけた子供のように瞳を輝かせた。

「そうか。では問おうか、衛宮タ士」

成る程、次の問いこそがもっとも言峰が訊きたかった質問か。

「もしも過去をやり直せるとしたら、君はやり直しを望むか」

「願いを叶える願望器。聖杯か？」

「君ならば私の言いたい事も分かるのではないかね？君は聖杯を手に入れたくはないのか？」

「いんや。人間、あんなもん欲しがると碌な目に遭わねえからな。」

俺は貰えるもんは貰つとく主義だが、命張つてまで欲しいたア思わないね。それに冬木の聖杯は切嗣が破壊したじゃないか」

真実、あの聖杯は無くなった訳じゃない。

だが言峰は俺の白々しい言葉をあたかも関心したように頷いた。

「ほう。たいしたものだな。其処まで知った上で、おまえに私怨はないというのかね。いや、そんな君だからこそ断言しよう。この先、後数年もすれば再び聖杯は現れる」

「……へえ。断言した理由については言及しないが、仮にその話がホントだとしても、んなこと俺に話しても良かったのか？」

この男の愉快げな笑みも大概白々しい。出来る事なら、早々と殺してしまいたいものだ。が諸々の事情のおかげで、ソレは出来ない。

今この男が不可解な死に方をしたら管理<sup>セカンドオーナー</sup>者たる遠坂が不審がる。何より、あの王様が現界しつづけたまま野放しになるし、俺の存在にも目をつけられる。

こんな男だが、今はあの傲慢王の抑止力だ。最悪死にかねない。

「何、問題ない。この地の魔術師ならば何れしれる事だ」

「たしかにな。だがたとえ俺がマスターに選ばれたとしても、俺の願いは聖杯に叶えてもらわなくともいい」

俺の願いを叶えられるのはただ1人。

聖杯に叶えてもらうような事じゃない。

「そうか。やはりおまえも衛宮のものというワケか」

「……おまえ、俺を試したのか？」

無表情を崩し、睨みつけるが言峰が動じる訳がない。



愉悦の笑みさえ浮かべている。

そんな両者の間に麻婆豆腐が置かれた。

「アイ。マーボードーフおまたせアル」

途端、言峰の方の雰囲気が急変した。

俺の方は置かれた赤い煮釜に目を奪われる。

「漸く来たか。……ム？なんだ少年。食べたかったのかね。生憎これはやれん」

「イツ！？んなもんいるか！！」

## 神父甘言（後書き）

オチ（笑）が微妙だったかも…。

つかこの話自体微妙ですよ。すいません。

私もこんなムサイおっさんじゃなくて女の子を出したいんですけどね。

中々話が進まなくて困ってます。

過去編？はまだ何話かやる予定。

自傷自虐（前書き）

士郎と兄やん。

兄やんの兄貴らしさ？を發揮するお話。

## 自傷自虐

その事件をおこした原因は酷く不愉快なものだった。

元々、俺や士郎が浮いた見た目だった事がおおきかったが。イジメと呼ばれる行為に拍車をかけた大元は、いつ何処から漏れた情報かしないが、あの大火災の遺児だと知られた事にあった。

時には暴力の的に晒された事すらあったが、どんなに人数が多くとも俺が負ける筈も屈服する訳も無く。鬱陶しくはあれど、身も心も傷つく事は無かった。

しかし、免疫のない士郎からしてみれば、幼い子供の悪意ある言動は傷つくばかりだった筈だ。そこへ集団リンチに遭えば苦痛は計り知れない。

全く歯が立たない俺への攻撃を諦め、士郎の方に全ての悪意が向けられたのだとしても不思議はない。

まあその事が余計に俺の神経を逆撫でする原因になった訳だ。なんと、頭に血が上った俺はその場にいた少年達を半殺しにしてしまった。

「ごめん」

俺が安易に怒りに身を任せたおかげで、転校せざるを得なくなった。道連れにした士郎には謝るしかない。

今頃、事の騒動を収めるために奔走している切嗣には特に迷惑をかけてしまった。あの温厚な切嗣に平時に殴りかかれるくらいなのだ。怒りの程が伺える。

「……………」

自室のすみでうずくまる士郎から返事はない。

正座した俺はますます居たたまれず、顔をあげられなくなる。

「すまない。おまえが報復対象になる事くらい予期すべきだった。こんな事になったのも俺の所為だ。謝って済む事じゃないかもしれないが、ホントに悪かったな」

眉尻を下げた情けない謝罪に効果があつたとは思えないが。悲痛に歪んだ顔をした士郎が必至に首を振っていた。

「夕兄は何も悪くないよ……」

「士郎？」

士郎が何かに思い詰めたように暗い。

これは俺より自責の念が強いかもしれない。

「いや、そりゃあれはやりすぎだったかもしれないけどさ。でも夕兄が全部悪い訳じゃないよ。……兎に角、ごめん」

「おいおい。なんで、士郎が謝るんだ？」

「……………」

士郎が再び俯く。

俺は吐きたい溜息を飲み込んだ。

「言いたい事があんなら言え。俺は魔術使いだが、人の心が読める訳じゃねえんだ」

「俺、も殴った、から」

ボソリと口にした言葉が妙に耳に残った。

呆氣にとられた俺に何を思ったのか士郎の目尻から涙が滲んでくる。

「え！おい、士郎！男がんな簡単に泣くんじゃねえ！！つつかおまえに泣かれると俺が困るじゃねえか」

「……1発、だけど…俺も、殴ったのに……」

「おつまえなあ！たかが1発くらいなんだよ。おまえなんかなんも悪い事なんかしてねえのに何度も殴られたじゃねえか」

「でも……」

訊ねるまでも無く分かる事だが、お優しい俺の弟は自己嫌悪に陥ってしまったらしい。

集団暴力を受けた士郎の方が遙かに酷い傷を負ったにも関わらず…。これでは責任をかんじている俺が馬鹿みたいだ。

今回の事は俺が原因だしイジメの主犯者が悪い。士郎は全く悪くない。むしろ後何発か殴っても許されるんじゃないかとおもう。

「おまえは深刻に悩みすぎなんだよ。じゃあ訊くがな。もし他の奴がおまえとおなじ立場だったら、おまえは何もせず黙って見ていられるのか？」

「そ、そんな訳ないだろ！助けるに決まってるじゃないか！」

予想通りの返答に呆れつつ、溜息を吐く。

「どうやって？」

「それは…ッ」

「話し合いなんていわないよな？」

これも予想通り言葉を詰ませた。

正義感の強い士郎が容易く人に手を出す訳がない事くらい分かる。まず話し合いをしようとする事も同様に予測出来る。

「あのな、士郎。誰かを守るためには誰かを傷つけなければいけな

い事もあるんだ。俺が今回してしまった事も士郎を守りたかったからだし、勿論自分自身を守るためでもあった。だがおまえは意味無く人を傷つけるような奴じゃない。だからおまえは絶対悪くない。悪いのはおまえに殴られた奴の方だ」

押し黙った士郎に微笑みかける。

「……でも、そんなの……」

漸く開いた口が納得いかないと呟く。

士郎が人を殴った程なのだから、おおかた俺や切嗣の事を中傷されたのだろう。それでもお人好しの士郎は罪悪感が沸くらしい。呆れてものもいえない。

「正しい事を正しいと言えるのはいい事だ。だが互いの正しさを主張し、押しつけ合い意見を違えてしまったなら、ぶつかるしかない。自らの正しさを通したいんならな」

「夕兄のいう事って、時々凄く難しくって、よく分かんないよ」

困ったような顔をした士郎の橙色の頭が、すっかり沈み始めた夕焼け空と重なった。その頭をくしゃくしゃと撫でると、士郎が唇を尖らせる。

「ま、今は分かんなくてもいいさ。つまり何が言いたかったつと、おまえは全然悪くないんだってことだな！うん！」

「やっぱ夕兄って、意味分かんない」

不服げに拗ねてしまったものの、手を振り払わない幼い弟に苦笑した。

## 悪魔片鱗

あの過剰な暴力事件が既に落ち着いたことは、記憶に新しい。

勿論、転校した先が必ずしも安心とは限らない事も分かってたつもりだった。だが半年早々に目をつけられ、放課後の人気ない体育倉庫前に呼び出しを受けたのがつい先刻。

そんな事をしたくだらな少年達は俺の足下に蹲ったまま動かない。

「衛宮君。あなた、強いよね。でもそれはないんじゃないかしら」

その場に相応しくない可憐な少女が言った。

学級委員だからか、正義感が強いのかお人好しだったのか、見過ごす事が出来ずに様子を見に来たらしい。まあ1人に対し、複数人につれられた知り合いを心配するのは、普通かもしれないが。

しかし、俺個人としては、わずか8人で挑んできた名も知らぬ彼らの無謀を賞賛したい。

「なんの事だ？」

「あなたの下にいるソレよ。今時まんがでも見ないわよ？」

「ああ」

漸く俺の椅子になっっているものに気がついた。

俺が違和感無く座り込んだ下には、つい数分前俺自身がのしてしまった少年CだかDだかがいる。

彼女の気配が遠のくまでは休憩しようと思っていたのだが、困った事に大元の気配の方が自分から現れた。

「べつにいいじゃねえか。んな事より、おまえはこんなどこに何しに来たんだ？」



「わたしが何処で何しようがあなたには関係ないじゃない」

赤面した彼女がつんと顔を逸らした。素直じゃない。これが世に噂のツンデレ少女かと思わず関心する。  
俺自身はツンデレに興味はないが。

「はは、心配してきてくれたんだよな。ありがとな」

「ッ」

外れていないのだから反論しようにも反論出来ないようだ。それに、彼女は否定する程に子供でもない。

彼女は飲み込んだ言葉の代わりに溜息を吐いた。

「もしかして、私が後を着けていた事に気づいてたワケ？」

「まあな。いやあ、君みたいな美人に心配してもえるなんて、光栄だな」

「……あああ！もおおお！なんなのよ！！あんたはッ！」

今度は照れたせいで火照った頬が、対照的に怒りで顔が紅潮する。からかいすぎると爆発するのが赤い悪魔の特徴だ。

「いやいや。それは俺の台詞だね。結局のどこ分らないんだが。遠坂凜、君は何をしに来たんだ？」

目を細めれば、遠坂が眉を顰める。

実際彼女は仲裁のために来たんだろうが、俺に必要なことは分かった筈だ。だったら、他に何か言いたい事が用があつたんじゃないのか。

「たいした事じゃないわ。少し忠告してやろうと思っただけよ。あ

あなたは以前の学校でもおなじような事をして、転校してきたみたいじゃない」

「勘弁してくれ。もう、そんな事まで噂になってんのかよ」

「嘆く前に、自分が目立つこと自覚した方がいいわよ？」

につこりと笑顔を浮かべる赤い悪魔こと遠坂。

小学生の少女が浮かべるものじゃない。口元がひくひくと引きつる。

「つつても困んだよな。外見に関しちゃどうしようもないワケだし」

「手っ取り早くその髪を黒く染めれば？」

「染めねえよ。元々これは地毛だ。染める必要なんかないね」

たしかにこの朱色の髪は目立つ。俺や士郎が反感を受ける理由の大半は、この髪が原因だ。朱と橙の髪なんか中々ない。

だがこの容姿は、この世界の「俺」の両親の唯一の形見みたいなものだ。そんな理由では捨てられない。

「そう。あなたがそういうなら無理にとは言わないわ。ま、折角綺麗なんだし勿体無いものね」

「……綺麗？」

あまりにも普通に言われたおかげで、反応が遅れかけた。俺は意外な人物からの言葉に目を丸くする。

俺の様子に今頃気づいたのか遠坂が再び顔を真っ赤にした。

「力、カミツ！髪的事よ！？当たり前じゃない！！」

「いや、そんな焦んなくても分かってるが」

「わ、分かってんならいいのよ。……兎に角、あなたは少し周りに気を配るべきだわ。分かったわね？」

「あ、ああ」

恐い顔をする遠坂に気圧され、頷く。  
遠坂はそのまま走り去ってしまった。

「いったい何なんだ。遠坂の奴」

心配してくれたのは分かったが、照れたのかなんなのか彼女の行動には首を捻った。原作の遠坂の性格を考えるとメリットや好意がなければ、ただの知人をこんなにも気にかけない筈なのだが。

原作でも面倒見はよかった事にしても、あれは元々彼女が士郎に好意があつたからだ。影から見守る妹の桜の知人だった事も関係あつたかもしれないが。

「……この場合、桜関係か？」

時々、公園に居合わせれば遊んだり話したりするくらいには、俺が桜と仲が良いのを知っていたのかもしれない。たしかに、俺に何かあれば桜が気にする。まあどんな理由にせよ、遠坂がいない方が都合はいい。

微量といえど魔力をつかう事になるのだ。彼女が近くにいれば、バレルの恐れがある。聖杯戦争が始まれば、バレル事にはなるが。今バレルした場合の言い訳が面倒だ。原作時にバレルした時に深い追求を免れる事が出来たのは、非常時の聖杯戦争だったからこそだと思われる。たかだか軽い暗示をかける程度だが、士郎に迷惑がかかるかもしれないのだ、慎重にもなる。

しかしその慎重に暗示をかけるべき少年を蹴り起こした。何せ、暗示をかける際は慎重にやるつもりだが暗示をかけるべき対象を慎重に扱ってやる義理はない。

「おい。生きてつか？」

「…ぐッ、うう」

痛みで意識が朦朧としているのか、呻く少年を見下ろす。  
1人だけ目覚めた少年は自分へと向けられた生暖かい微笑みに怯えた。

「ヒッ……！」

「ああ、悪いね。だがおまえらに同情の余地はないよな」

## 悪魔片鱗（後書き）

ようやくと我らが学級委員長遠坂さんの登場。

凜ちゃんは兄やんの事を何気に前から気にしてました。勿論恋愛的な意味は含まれません。将来的にどうなるか分かりませんが…。

にしても、あいかわらず兄やんの興味を引く事が出来ない。

あの凜すら撃沈した。

いや、待て！まだ、まだ兵はいるんだぜ…！

次回、桜が動き出す！？

## 恐慌春麗

高校受験が終わった中学3年最後の春。士郎もこの春から中学3年生に繰り上がる。

並みの人間なら少しは浮かれる学期の節目に、俺は校庭の片隅で憂鬱な溜息を吐いた。

目前では俺の心を写すかのように炎がゆらゆらと揺れる。

「こんなとこで何やってんだよ」

士郎の同級生兼桜の兄たる間桐慎二が、俺の陰気な雰囲気不堪え難くなったのか、唐突に訊ねてくる。

そのあいまも火柱がパチパチと迸った。

「慎二じゃないか。つつかいたのか」

「いたよ。悪かったね、僕なんかで。あいかわらず弟しか眼中に無い奴だな。まあその弟に気づかない所を見ると重症みただけだよ」

「夕兄、ホントにだいじょうぶか？やっぱり今日は休んだ方がよかったんじゃないか？」

我が弟の声が間近に聞こえ、目を見開く。

この俺とした事が、士郎に気づけない程の愚かな失態を演じてしまつたらしい。

「し、士郎ッ！すまない！！」

「俺の事はいいよ。それより夕兄、ふらふらじゃないか。最近寝て無かったみたいだし、だいじょうぶなのか？」

「なんだよ、衛宮兄。そうだったのか？たしかに凄い限だな」

そんなに酷い顔をしていたのか、覗き込んでくる慎二が顔を顰めた。俺が問題ばかりおこすからか（主に喧嘩や他人の問題に巻き込まれる事もしばしばあった）士郎は随分と心配性に育ってしまった。今は心配事をかかえているのだから尚のこと。

「あー、まあな」

頭が回らない。ただ燃え逝く手紙の行方を見つめつづける。無事に全てが燃え切らねば安心も出来ない。

慎二はおざなりな俺の返答に漸く異変に気づいたようだ。怪訝そうに首を傾げる。

「ていうか、さっきから何燃やしてんのさ」

「呪いの手紙」

即断即答した。

それがしつくりくる言い方だったのだ。誰が否定しようが関係ない。この手紙は所謂「呪いの手紙」だと名言する。

士郎は曖昧な表情を浮かべたが、暫し考えた結果その通りだと思ったのか同意し頷いた。

「ハア？この燃やしてんのって、手紙だったのかよ。しかも呪いイ？」

慎二の目が明らかに胡乱げになる。

「俺もこういう言い方はしたくないけど、夕兄のいう事も間違っていないと思う」

「……いったい何があったワケ？弟の方も分かってるみたいだし。何？僕だけのけ者？」

「いや、そういう訳じゃないんだ」

心無しか士郎が青冷めたように見える。  
俺なんかより士郎の方が余程心配だ。

「おい。士郎こそ顔色が悪い。だいじょうぶか？だいたい、元々は士郎に送られてくる手紙なんだ。おまえも気をつけろよ？」

「…うん」

「ますます意味が分かんないよ。弟の方に送られる手紙のことで何でおまえの方が体調悪くなってるんだよ」

「ああ、実は……」

そも手紙が届くようになったのが1ヶ月前。

始めは悪戯かとも思っていたのだが、1週間つづいたあたりで漸くこれが本物の俺にたいするストーリーカーからの手紙だと気がついた。

「ストーリーカー？……「呪いの手紙」なんていうからには衛宮に恨みがある奴の仕業じゃないのかよ」

「いや。俺達も始めはそう思ったんだ。が、すぐに考えを改めた」  
「？」

訝しげな顔をする慎二の疑問に答えるべく、重い口を開いた。仕方ない。内容が内容なのだ。それに中学生の内からこんな被害に遭うなど思いもし無かった。

まず、手紙の内容の殆どに俺と士郎の行動が綴られている事だ。授業以外では殆ど共に行動する事への抗議に始まり、士郎への悪口や反感めいた言葉までが3枚から5枚ぐらいに渡って書かれた手紙が毎日送られてくる。

何より「呪いの手紙」と命名した理由は、クラスメイトの少女と俺の写った隠し撮り写真が、少女の方の姿がズタズタにされたり、毎



出来る手紙に小型とはいえ「呪いの藁人形」が同封されていたからだ。そんな不気味な手紙を「呪いの手紙」といわず、なんといえようか。

「そんなかんじで、俺と土郎への2重の嫌がらせなんだ。俺達がこんなに疲れてる理由は分かってもらえたか？」

「それは……なんというか、凄いな」

「いい迷惑だ」

「夕兄、そんな言い方……」

「純粹な好意なら俺も素直に喜んだが、これは悪意以外の何ものでもないんだ。よって、おまえが気に病む必要は何処にもない」

無論、俺がどれだけ辛辣な言葉を吐こうとも土郎が気にしてやる必要はない。実際、既に吐き捨てたようなものだが。

自分でも目が据わった事を自覚する。

「そろそろお昼休み終わりますよ、先輩」

ふと少女の穏やかな声音が耳に心地良く通りぬける。

「桜か」

「こんにちわ、夕先輩。これ、すぐそこに落ちてましたよ。先輩のものですか？」

「ゲッ！」

桜が拾ったものを見て、頬を引きつらせた。

その手紙は所々が焦げていたものの、全て燃やし処分したつもりの悪夢の元凶。今だ原型を留めている命名「呪いの手紙」だった。

「先輩？どうかしたんですか？」

「あー、いや。なんでもないんだ、桜。これは確かに俺のだな」

ひっくり返った声を出したものだから桜が目を白黒させている。

「おい。それが例の手紙か？」

「ああ。見るか？」

慎二はあんな事を聞いた後にも関わらず、好奇心が掻かれるのか興味深々に手紙を観察する。

べつに読んだところで面白くもなんともなく、気持ちが悪くなるだけだとおもったが。

案の定、好奇心に負けた慎二が受け取ったが、段々顔色が悪くなる。読む前から蒼白な顔するくらいなら読まない方がいいだろうに。

可愛らしい便箋の跡形もない用紙に目を走らせるあたり、きちんと読んでいるらしい。

「こ、これ……」

「なんだ、慎二。読んだなら時間もないし燃やすぞ。授業にも遅刻しちまう。士郎、行こうぜ」

「そうだな。慎二、だいじょうぶか？」

慎二の顔色が悪いのは自業自得だ。

まあその慎二がやけに火の中に放り込んだ手紙と桜を交互に見比べているのが気にはなったが。

今は問い詰める時間もない。慎二の事なんかで士郎を授業に遅れさせる訳にはいかないし、燃え尽きたら火を消す事も忘れないようにしなければいけない。

「桜もわざわざ呼びに来てくれてありがとうございます」

「いえ。お役にたてて嬉しいです」

大袈裟な桜に苦笑し、頭を撫でる。  
その時、少女の桜色の艶やかな口唇が、妖しげな笑みを象った気がした。

恐慌春麗（後書き）

時間がいつきに飛びました。

さて、皆さんは黒桜に気がつきましたか？

ストーカーの正体は分かりますよね？

ヒントはワカメこと慎二君の態度。…やつは気づいちゃいけない事に気づいてしまったんです。おかげで、やつは挙動不審でしたよね

（笑）

兄さんは気づかない。

とりあえず兄さんは士郎が第1。

## 前世閑話（前書き）

兄やんの前世のお話。

バッドエンド的な話のためご注意ください。

前回に言い忘れましたが改訂分の話が終わりました。

実は今回の話はいつか書こうと結構前から思っていた話です。やっ  
と書けました。次回からは本編にいきたいと思っています。

## 前世閑話

日々繰り返され、つづく日常の平和。

俺のこの17年間に不満がない訳じゃないが、特別物騒な事がおこつて欲しい訳でも無かった。

自分が恵まれている事は自覚していたし、最近の悩みと云ったら彼女と遊びに行く事が多くなつたせいかな金欠気味な事くらいだ。むしろ、こんな事を不満に思える日常が幸せだったのだと今は分かる。友人とのたあいないかけ合いや喧嘩。授業中の雑音に混じる笑い声。待ち遠しいお昼ご飯や休み時間のチャイム。放課後の喧騒。

あの時、そんな些細な事を愛おしくかんじられたなら、今更後悔なんかないに違いない。数時間前の出来事が走馬灯のようによみえる。

もしかしたら、つい数秒前に交わした彼女との口づけの方が夢だったのかもしれない。否、この目の前の凄惨な惨状こそが夢なのか。それこそ俺の単なる願望に過ぎないのか。

「おい。見ろよ」

「あん？んだよ、まだ全員殺してねえのかよ」

「いや。今帰つたみたいだな」

「運の悪い奴だ。面倒だが始末しとくか」

しかし、俺の願いも虚しく、侵入者たる見知らぬ男達2人は残酷な現実を突きつける。放心した俺を気にも留めず。

もつとも、俺自身が壁に飛び散った血痕と死にかけの弟に目を奪われ、不穏な言葉の数々に構ってやれる余裕など無かったが。

「ア、」

混乱からか、ぐるぐるとめぐる血液が逆流してしまったのかと思つた程の極度の緊張感が俺の全身を強張らせる。

血溜まりの中の弟が懸命に伸ばす手が恐ろしい。

ドクツドクツと煩い心臓の騒音がやけに鮮明に聞こえる。今までか  
んじた事のない死の匂いに充満した馴染みのあるリビングが異空間  
のようだ。

全く機能を停止した様子の脳みそが、体は元より本能が、「早く逃げろ」と訴えかける。

7

逃げなければ……。すぐにでも走り出さなければならない。

[illegible]

「兄さ、ん」

!!

弟の掠れた声に反応した体びくと跳ねる。

漸く動いた体が戦慄く。

ドツと全身の汗が噴き出したと思った時、気づいたらその場から後退っていた。

動けずにいたのが嘘だったかのように必死に駆け込んだ先は、玄関などでは無く階段。自らの失態に気づいたのは自室に飛び込んだ後だった。

「チツ。そんなとこに逃げても無駄だっつうの」

「あまり長居したくはないんだがな。全く面倒なことをしてくれた」

男達が苛立たしげに舌打ちし、扉を蹴った。

1人は多少冷静なようだが乱暴なのはおなじ。その内蹴り破られるのも時間の問題だ。

俺は焦燥から乱れる呼吸を無視し、部屋を見回した。失態を犯してしまった事は今更嘆いたとこで致し方ない。そんな事よりも何か此処から脱出する手段を探さなくてはならない。

「そつだ！け、携帯は…！？」

こんな時こそ警察を頼るべきなんだ。思い至った俺は通学鞆を漁った。

そのわずかな時間すら惜しい。

「あ、あつた！」

「警察に通報しても無駄だぜ。警察が駆けつけるまでにオレらがおまえを始末するからな！」

男達には扉越しの俺の行動は筒抜けらしい。

だが言われてみればその通りだ。他の脱出方法を考えた方がいくらか建設的なような気がする。俺は警察に通報するのは断念する事にした。

とはいっても、唯一の脱出経路たる扉は男達に塞がれ、手詰まりの状況だ。

「後は…窓しか、ないじゃないか……」

此処は2階。飛び降りた際に、下手をすれば死ぬ可能性とて有り得る。

だがこの場に留まったとしても殺されるのを待つ事しか出来ない。どちらを選んでも死の危険性はある。



それに、いまだに息のあった弟を置いて逃げる事が俺に出来るのか。両親の死は確認した訳じゃないが恐らく生きてはいまい。

わずかに残った理性やら本能やらは逃げた方がいいと焦きたてる。あの血臭の酷い室内と血を浴びたように赤い弟を思い出すと吐気をする。進んで戻りたいとは思わない。

「クソッ」

喚いたところでどうしようもない。弟はあのまま死んだかもしれないし、俺はこれから死ぬかもしれない瀬戸際だ。考える暇なんかない。

「行動あるのみ、だ」

結論は始めから用意してあった。後は俺が覚悟を決めるだけだ。その間、男達は勢いをつけ、ドカドカと乱暴に扉を蹴りつける。

「っらあ！」

「ふん。手間を取らせやがって」

ついに盛大な騒音をたて、扉は壊された。

蹴破られた扉は無惨な姿だ。だがそんな事を気にかけるだけの余裕はない。

好機は今しかないのだ。

「ッ」

騒がしい方の男が足を踏み入れるまえに男へと突進した。思わぬ事態に不意をつかれた男は無様にも階段を転がり落ちた。幾分か冷静な方の男は仲間の男が気絶したのを確認する事もなく、俺

に拳銃を向けた。普段の俺だったら向けられた銃口に身動きすら出来無かったに違いない。だが今のアドレナリン全開の俺は、持っていた椅子を投げつける事に成功した。

「このガキイ！」

激高した男が撃った弾は見事外れ、窓硝子を撃ち抜いた。大量の汗はかいているものの、俺は無傷だ。

流石にこの音を聞いたら誰かが通報くらいはしてくれる筈。男の方もこれには焦ったのか再び引き金を引こうとする。

最早その事に怯える余裕もなく。俺は停まらず男の懷に飛び込んだ。

「なッ！？」

そのまま頭突きを見舞ってやった。思った以上に効果があったのか、男が仰け反ると共に悶絶している。

隙だらけの男を先刻の気絶した男同様、今回は自発的に階段に突き落とした。

行く先を遮る邪魔者はいなくなった。今度こそ、俺が駆け下りる。

「  
」

過度の恐怖から呼べ無かった弟の名を漸く叫ぶ。

そう、俺の結論は出ていた。この俺が家族を、弟を見捨てる事など出来よう筈がないのだ。

けれど、時とは残酷なもの。決して、待つてはくれないもの。

「え…？なん、で？」

血塗られた赤い部屋に俺を除いた生者はいない。

虚しく響いた弦きが俺の孤独をたしかなものにした。

## 前世閑話（後書き）

当初、出そうかと思っていた兄やんの前世のなまえは桐生蒼士<sup>キリュウアオシ</sup>。弟が尚哉。

るる剣の蒼士様がスキだったんで。

弟のなまえはなんとなく浮かんだだけ。

すいませんメチャクチャ蛇足でしたね。

## 異端痕跡

その日の俺は終始何をするにも上の空だった。

無論。左手の甲に刻まれた聖痕の事を考え込んでいたからだ。

たしかに、近々冬木市の「聖杯戦争」が始まるのだから、原作知識のある自分がその事自体に今更驚くことはしない。しかし、それも「知識」に含まれない事態がおこればべつだ。実際、この世界にいない筈の俺に令呪が刻まれた事が異常。だが不足の事態がおこる可能性は始めからあった事だ。

そのため、急いで士郎の令呪を確認した結果、士郎の右手の甲に刻まれていた。あんな戦争に参加するための資格など刻まらない方が士郎のためにもよかったんだが。

今更悔やんでも仕方のない事だ。それに自分の異質性を鑑みれば、俺自身に影響が出たところで不思議じゃ無かった。

そんな懸案事項をかかえた俺のまえに1人の少女が現れた。

「なあ、イリヤスフィールよ。何故、手を繋ぐ必要があるんだ？」

少女の名はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。

その少女に握られた柔らかな手を胡乱げに見つめる。

「ムー、お兄ちゃんが送ってくれるって言ったんじゃない。淑女の  
エスコートくらい出来ないとモテないわよ」

不満を露わにするイリヤが頬を膨らませる。

始めこそ、少女が学校の校門にいた事に違和感を感じたが、柳洞が近くにいた手前見た目幼女を追い返す訳にもいかず。しかも彼女は俺達兄弟の最後の家族だ。無碍にも出来ない。

何より、士郎の用事を変わりに頼まれ、遅くまで居残ったせいだ日

も暮れていたのだ。傍にバーサーカーがいるのかは分からない。1人かもしれない彼女を送るのは当然のことだ。

これがあの殺しても襲われても平気だろう桜だったらべつの話だが。

「…それとこれとは関係ないと思うんだが。まあいいか。それより君は何の目的でいらしたんですかね。お嬢さん」

「ふふ、わたしのことはイリヤでいいよ。今日はお兄ちゃん達に忠告しに来たんだ。早く喚び出さないと死んじやうよって」

「それはわざわざご苦労様なことだ。まだ開始の合図すらないつつのにやる気満々だな、イリヤは」

ある程度、予想はしていたが、若干呆れ気味に肩を竦める。まあ実際、唐突すぎる言葉にめげる訳にもいかないのだ。  
順応するしかあるまい。

「でもそれだけじゃないわ。お兄ちゃんには興味があつたの」

「俺に？」

「そうだよ。だって、お兄ちゃんは8人目のマスターなんだもん」

青みがかった蒼黒の目を見開いた。その双眸でイリヤを凝視する。だがよくよく考えれば納得出来る事だ。「聖杯の器」たるイリヤが知っている事が当然なのかもしれない。彼女が俺に興味を持つ事も十分考えられることだ。

彼女の言葉で俺の扱いは何処までも異物にたいするものらしい事も判明した。しかも、イリヤのこの原作を逸れた行動以前に認めたくない事実だが、桜や慎二の性格が多少捻れたのも俺のせいかもしれない。

「8人目、ねえ」

「あんまり驚かないんだね。つまんない」

「つまんなくて結構」

「わたしは驚いたわ。もう7人揃っていた筈のマスターに、突然8人目が現れるんだもの」

夜道を照らした月の光が無邪気にハシャグイリヤの白銀の髪を輝かせる。その浮世離れた姿は西洋の妖精を思い浮かばせる程、幻想的だ。

この見た目以上に幼さを感じさせる少女が、俺や士郎より年上だとはいまだ信じられない。

しかし、幼い少女から簡単にあたえられた情報には皮肉げに笑った。その気安さは絶対的な自信を感じさせたのだ。

「君は俺なんかが8人目で期待外れだったんじゃないか？」

「そんなことないよ。お兄ちゃんを選んだのは聖杯だもん。つまりお兄ちゃんにはそれだけ強い願いがあつたってことでしょう？」

「願いか。あるにはあるがな……」

「もしかして、嬉しくないの？」

正直嬉しくはない。

むしろ士郎を巻き込んだ元凶に恨みすらある。イリヤの場合、自分の生まれた理由たる聖杯を盲目視する傾向があるみたいだが。まあある意味、当然の事か。

考えてみれば、アイツベルンの聖杯たる少女が最大の犠牲者。本人は無自覚かもしれないが、今のイリヤの存在意義の象徴は聖杯だ。だから彼女は聖杯に身を捧げる事に疑問を持たない。

血が繋がっていないとはいえ姉の殉教者のような思考に苦々しくなるばかりだ。

「いや、好都合といえば好都合だね。士郎を守りやすい。しかし、君もわざわざ敵に会いに来るなんて物好きなんだな」

「モノズキ？面白い事いうんだね、お兄ちゃん。サーヴァントもつれてないくせに」

くすくすと愉快げな笑い声が暗い路地に響く。

そんな笑みの中に明確な自負がうかがえる。イリヤは自分の勝利を信じて疑いすらしならしい。

「そりやそうだな。ま、忠告には感謝するよ、イリヤ」

イリヤの美しい銀髪を優しく撫でる。

その事に驚いたのか紅い双眸を見開いた。

「えへへ。どういたしまして」

撫でられたのがそんなに嬉しかったのか、礼を言ったイリヤが雪のように白い頬を淡く染めた。

そのあまりにも愛らしい姿には込み上げるものがあつた。だからつい口をついて出てしまった。

「なあ、俺がいえたことじゃないが……君は本当にこのまま聖杯戦争に参加する気なのか？」

「今更どうしたの、お兄ちゃん？」

「いや、な。君みたいな優しい子がこんな茶番で命捨てていいもんなのかって思ってたね」

言ってしまったから後悔した。途端にイリヤの雰囲気冷たくなったのが分かったからだ。繋がれた手も離れ、既に後悔しても遅い。其処には先程までの無邪気な少女の姿は無く。血の臭いを纏わせた魔術師の姿があつた。

まあ気分を悪くするのは当然だ。彼女は俺が茶番だと言った戦争に



身を捧げるのだから。

「……わたしがなんなのか、知ってるんだね。でもダメだよ。次に会ったらわたしはお兄ちゃんを殺すんだから。それまで死なないでね。バイバイ、お兄ちゃん」

俺はそれに応えず。

闇に紛れ去る頑なな少女の背を見えなくなるまで茫然と見送った。

## 異端痕跡（後書き）

イリヤルート難しそうだなあ…。

でもついに兄やんが士郎以外に興味を示しました。

まあ兄やんは家族にとことん甘いんで。とはいえ士郎以上になる事は誰にも無理だろうな。

間桐兄妹は次回出ると思います。

## 日常分岐（前書き）

桜がオリキャラ化してます。扱いも凄く悪いです。

桜ファンの人には不快な想いをさせてしまうかもしれません。  
くれぐれもご注意ください。

## 日常分岐

俺の間桐桜への認識はあくまでも、妹以下の少女にたいするものだった。それは単なる友人の枠に過ぎない存在。酷い言い方かもしれないが、実際正しい言い方なのだから仕方ない。

ただ、俺は士郎が大事にするものだったら、たとえ俺の嫌いな人間だった場合でもなるべく大事にするし、しようと努力する。だから士郎が年下の桜の事を妹同然に可愛がるのを相応に扱った。

だがその扱いが、桜の雰囲気をかえた原因の1つなのかもしれない。

「夕先輩、今日こそ私といっしょに帰ってくれますよね？」

「慎二の奴と帰ればいいだろうが」

「その言葉は聞き飽きました。もうそんな言葉では誤魔化されませんからね」

「あつそ。んじゃハッキリいわせてもらおうか。俺はおまえと帰りたいくねえんだよ。分かったらテメエ1人でとっとと帰れよ」

そんな風に、変わった桜のあまりのしつこさに苛立ちを隠せない。

だからかつい普段以上の辛辣な言葉を浴びせてしまった。桜がこんな風になった原因も俺が多分に影響を及ぼした結果だったし、ストーキング紛いの事をした時にもここまでの辛辣に言った事はあまり無かったが。

この2月2日の今回ばかりは桜につき合っている暇はない。それ程、重要な日だ。

「あれ？今日の先輩はなんだかいつもと違いますね。ぞくぞくしてきました」

「マジ早く死んでくれないかなあ」

遠い目をした俺がつぶやいた。

桜に遠慮など必要のない事だったのだ。

「もしかして士郎先輩と帰るんですか？」

「おまえには関係ねえだろ。つつか着いてくんなよ」

士郎を迎えに行く道中を桜が追い縋る。これは流石の俺も鬱陶しい。しかもいつも以上にしつこい。それでも桜が何かに気づいたんじゃないのかと気が気じゃない。

「おまえしか頼める奴いないんだよ、衛宮。この僕が頼み事してやつてんだから、ここは頼まれるもんじゃないの？」

「うつん。…俺はべつに構わないんだけど。でも今日は夕兄と帰る約束したからな…」

士郎の教室に迎えに行ったら既に廊下へと出ている士郎と慎二がいた。

何やら慎二が士郎に手を合わせ、頼みごとをしているようだ。原作同様に女子を何人も連れ歩いている。しかも頼み事している慎二の方が上から目線だ。原作の間桐慎二よりはましだが、やはり高慢なところは変わらない。

たいする士郎はそんな態度の慎二に怒った様子は全く見られない。不本意極まりないが長いつき合いだから当然か。

「フン、そんなの断るか待たせるかすればいいじゃないか。僕は衛宮達みたいに暑苦しく男兄弟で帰るんじゃないんだよ。女性達を待たせてるんだからね」

困ったように言葉を濁す士郎へと吐かれる慎二の傲慢な物言いに俺も怒りより呆れが勝った。

だが困っている士郎を黙ったまま見ている訳にもいかず、慎二の肩を掴んだ。

「よお色男。暑苦しい男つつうのは俺の事かな」

「ひッ！夕士！！」

振り返った慎二の顔が青くなった。

まあ慎二の場合、士郎の事が絡んだ時の俺の怒り狂った姿を想像したせいかもしれないが。

「夕兄……」

「慎二君よ。人の弟をパシリに遣おうとした拳句その言いぐさは何なんだ？」

「あ……いや、その、まあなんだ。…とりあえず冷静に話し合おうじゃないか、衛宮先輩」

「俺は至って冷静なつもりなんだがな」

苦笑する俺が怒っていないのが分かってもらえたのか慎二が漸く安堵の息を吐いた。

「ねえ、先輩。士郎先輩は用事が出来たみたいですし、今日は諦めて私とかえりましょう」

「……おまえが諦めるという選択肢はないのか」

「なあ夕兄、この際だから1度くらい桜と帰ってやってもいいんじゃないのか？」

士郎は桜に甘い。今みたいに桜を庇うような事を度々いう事がある。だがいくら士郎の言葉でも従いたくないことはある。

士郎には桜が健気に見えるらしいが、勘違いも甚だしい。実際は計算高いし図々しいし鬱陶しい女なのだから。

俺が何より許せないのはそんな優しい士郎を桜が仇敵の如く睨みつけている時がある事だ。  
呆れて溜息を吐いた。

「このままじゃ埒があかねえし、この際俺がやつとくからおまえらは先に帰れ」

「え……なんでそんな事になるんだ？頼まれたのは俺なんだから俺がやるよ。だいたい夕兄、何を頼まれたのか分かってるのか？」

「ああ、弓道場の片づけだろ？」

「で、でもなにも部外者の先輩がすることないじゃないですか！」

「そんなこと言ったら士郎も今や部外者だろ」

常に無い程の意識した優しい俺の声音に桜の整った顔が歪んだ。

以前はたしかに弓道部員だったが、士郎が怪我で退部した為に俺も部活を辞めた。桜があくまでも俺を部外者よばわりするなら士郎も部外者だ。

そんな俺に最早説得は無駄だと気づいたのか桜が慎二を睨みつける。

「な、なんか夕土がやってくれるみたいな話になってるんだね。でもやっぱり僕が自分でやった方がいいかもしれないよね。はは、あはははは」

その視線に過剰に反応する慎二。

これには慎二も身の危険をかんじたのか、乾いた笑いを漏らす。

「いいって、いいって。俺に任せてくれ。後ろの彼女さん達をお待たせする訳にもいかないしな」

「先輩が残るんなら私も残ります。私は弓道部員ですから」

「いや、桜は士郎と帰れよ。俺は送らないぞ。でも女の子が夜道を歩くのが心配なら士郎が送ってやれ。な？」

「……………」

俺のあから様な拒絶の言葉に士郎が気まずげに桜の方をうかがう。慎二にも口を挟む隙をあたえず、桜を諦めさせるための口実を遺憾なく発揮させてもらった。

桜は忌々しげに兄を睨みつけ、唇を噛みしめた。帰宅後に慎二が桜の嫌がらせを受けるだろう事は想像に難くない。

簡単に想像出来る未来に現在少女達に囲まれたリア充慎二はただ愕然とするのだった。



## 敵前逃亡（前書き）

駄文の駄文。

兎にも角にも駄文。文才が欲しい。  
前回以上にヤバいです。

兄やんがデレる。キモイかも。

## 敵前逃亡

荒々しい息が日の暮れた暗い廊下に響く。校舎の中を逃げ回った拳句、全力疾走したにもかかわらず、今の俺は正に絶体絶命の淵。

目の前に聳え立つはコンクリートの壁だけ。全身汗だくの体で振り返れば、「士郎の死」を回避する代わりに俺がランサーに追い詰められる結末。

結果、そのまま槍が胸を抉られる筈だった（・・・）。

「坊主、オマエ何もんだ？」

「……ッ」

無言のまま目だけは離さない。

まあつい今し方殺されかけた相手なんだから当然の事だが。流石にサーヴァントの槍を完全に避けきる事は出来ず、左腕を掠ったらしい。

あやうく本当に心臓を貫かれ、死ぬところだった。相手は喋る余裕さえあるが、今の俺は極度の緊張状態のせいか呼吸が乱れ始めた。実際に今も俺が気を抜けば、死んだ事すら気づかせずに俺を殺せる筈だ。

それだけ俺とこの英霊の間には圧倒的な差がある。

「まあなんにせよ、少しは楽しめそうじゃねえか」

「」

冗談じゃない。誰が遊ばれてなんかやるものか。だいたい、何の策も無く追い詰められる程、俺は馬鹿じゃない。わざわざ追い詰められたのにも理由がある。常備している単なるペーパーナイフに強化の魔術をかけたのもそのためだ。

「ん……魔力を感じる。成る程。オマエ、魔術師か。ま、魔術師だろっが見られたからには殺せつてのが命令なんだな。悪いな、坊主。死んでくれや」

無造作に心臓を貫こうとしただけだったランサーが槍をかまえた。今度は先刻と違い俺への侮りはない。

今度こそ確実に殺されるのが分かる（・・・）。なまじ人間の域での実力があるからこそ分かるのだ。

「やだね」

だが次におこるだろう事を想像し、愉しげな笑みを浮かべた俺は床にナイフを突き刺す。

見た目には何の変哲もないナイフは意外な程すんなり床に突き立った。

「な、にを……って、ハアアッ!？」

瞬間、床に亀裂が入り、簡単に崩れてゆく。

後はただ、ランサーが何がおきたのかも理解出来ずに絶叫を上げた。まあ客観視したら有り得ない光景なんだから仕方ないんだが。勿論この学校の床がやわな造りだった訳じゃない。「死の点」を突いただけだ。

「やべッ、と!」

こうなる事を分かっていた俺まで落下するような愚を犯す訳も無く、窓枠に手をかける。

まさか崩落する廊下を悠長に見届ける余裕などある筈もない。俺は

壁づたいに降りるために窓から身を乗り出す。

その最中、垣間見た赤い男が驚愕の表情で俺を凝視していた事に気がついた。

「誰だ、貴様ツ！」

男は俺を詰め寄らんばかりの形相だった。だが俺に説明している猶豫などあろう筈もない。

仕方なく軽く手を振っておくだけに留めた。男はまだ何事が言いたげだったが、駆けつけた遠坂を抱える事を優先した。

俺も跳躍して学校から出る。

「にしてもあれがシロウ（アーチャー）か。未来の士郎だけあっていい男に成長したもんだ。まあ士郎だから当然だよな」

へにゃへにゃと弟の未来の雄姿に頬を緩めるも気は抜かない。

夜の路上を逃走する中ランサーが追って来たか気配を探る。暫くは平気かもしれないが、原作より早く追いつかれる可能性が高い。

その上彼はたしか最速の英雄だった筈。そんな訳だから、当然足に魔力を集中的に込めるのを忘れない。

しかし、信じられない人物を目に留め、その足に急ブレーキをかける。

「え、夕兄！？その怪我どうしたんだ！？」

「し、士郎！？お、おまつ、なんでこんなところにいんだよ！！」

「なんでって…。夕兄は遅いし、元々俺が頼まれた事だったから、手伝える事があつたら手伝おうかと思っただけだ」

全速力で走ったおかげで相当息の乱れた俺に目を丸くする士郎。槍を掠った腕の方の服にも見るからに痛々しい血が滲んでいる。

何故家にいないんだと怒鳴ってやりたいが、士郎の性格を考えれば予想出来ない事じゃ無かった。この事に関して俺は糾弾出来る立場に無い。

「そんなに急いで何があつたんだ？」

「説明は後だ。来い」

「ちょ、夕兄ッ！」

「いいから走れ！！」

こんな道端で長話をする時間はない。焦れた俺は無言を言わず腕を掴んだ。

兎に角、今は士郎にセイバーを喚ばせる事だけ考えればいい。俺の召喚は後回し。原作と異なる展開故に何がおこるか分からず。慎重に成らざるを得ない事が痛い。

士郎も俺の必死な様子に戸惑いつつも頷いた。屋敷までも目前。

「なあ、ホントに何があつたんだよ。それにその腕の怪我もだいじようぶなのか？」

庭先まで来ると力が抜けたのか士郎が漸くと言った様子で質問する。

「俺は問題ない。とりあえず話は土蔵に行つてから……」

「全くしてやられたぜ」

ゾクリ。

俺の言葉を遮った声が背筋を凍らせた。それは侵入者用の結界の警鐘が鳴るのと殆ど同時。士郎もこの鋭い空気にあてられたのか息を詰める。

バツと振り返れば、わずか10メートル先に槍兵のサーヴァントがいた。

「だが逃走劇もここまでだ。次もおなじ手はくわねえ。今度こそ観念してもらおうか」

「ハッ、冗談！」

「へ？」

強がりの言葉と共に断り無く士郎を担いだ俺の奇行に士郎が混乱し、ランサーが身構える。

たしかに今の彼に2度おなじ手が通用するとは思わない。俺がおなじ手をつかう訳もない。それにあまり魔眼を多用すれば、脳に不可がかかる。

だから、ただ単純にそのまま士郎を土蔵の中に放り投げただけ。

「えええ！？」

「チイ、何がしてえんだデメエは」

苛立ったランサーが突進する。それに併せて俺も後ろに跳び退く。だが追隨するランサーと一瞬の内に距離が縮まる。

突き出された槍に対抗すべく少しでもナイフでの回避を試みるが、易々と弾かれた。

「ッ」

反動で腕が痺れる。だが堪えなければ殺される。

崩れた態勢を整えるために身体を捻る。追撃の槍が飛んでくるのかと思ったら、意外な事に回し蹴りを喰らった。

吹っ飛ぶとまではいかずとも、蹴り転がされた場所は冷たいコンクリートの感触がする事からかなり飛んだらしい事が分かる。

「タ兄！だいじょうぶなのか！？いったい何がどうなってんだよ！

「！」

「ぐッ」

「魔術師にしては中々だったが……。ま、相手が悪かったな。大人しくそっちの坊主共々死ね」

「いやだっつってんだろぅが！」

「何！？」

いつ土蔵の中に突っ込んだのか、気がつけば隣には俺を揺さぶる土郎がいた。恐らく、今俺が殺されれば土郎も殺される。そのかんがえが浮かんだ途端、腹の奥底が焦げつく程の怒りが溢れ出るのが分かった。

そんな事をさせてなるものかと強く強く思った意志が、反映したかのように土蔵の中が目映い光でつまれた。

## 主従訪問

思った通り、溢れ出る光が収束した召喚陣の上には彼女がいた。彼女が呼び出された切欠は、おそらく士郎の中の聖遺物と俺の血だと思われる。

だがここに来て漸く異常事態に気がついた。露わになった凜々しき騎士王が、いつまでも契約の言葉を口にしないのだ。

まあこんな事態じゃ困惑するのも無理はない。

「あー、君を召喚したのは俺と其処にいる俺の弟だ。マスターは俺達2人だよ」

つまり今回の場合、士郎の中身が触媒で、召喚に必要な血液が俺のものだったせいか、結果的に召喚者が2人と認識されたのだ。だがそのことは俺からしたら好都合な事この上ない。

おなじサーヴァントのマスターだから士郎が無茶しようものなら口出しも出来るからだ。たとえ違ったとしても口出しはしたかもしれないが、その方が忠告やしやすいのはたしかだ。

「マスターが2人……ですか。そのような前例など聞いた事がありませんが。たしかにラインは貴方がた2人に繋がっていますね。いいでしょう。貴方がたをマスターと認めます」

「ああ。じゃ、早速ですまないがあの手サーヴァントを追い払ってくれ」

「了解しました。これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある。ここに、契約は完了した」

今度こそ正式に契約を結んだ少女が早々と土蔵の外へ飛び出す。すんなり了承した少女に違和感があったが、目を白黒するしかない



士郎の方が心配だ。

それも士郎は俺が介入したおかげで原作の士郎以上に現状を把握出来ぬままなのだ。いきなり戦いの渦中へ放り込まれたともなればこの反応も致し方ない。

「ア、おい！やめ　！？」

人外の男を追った少女の身を案じた士郎もその後を追った。

戸惑い通しの割に他人を心配するのだけは忘れないらしい。人の生来とは中々ぬけないものなのか。そんな士郎に呆れつつ俺も庭の方に出た。

少女の見た目が見た目故に心配するのも分からぬ訳じゃないが。士郎の異常なまでの献身ぶりを再確認した気がする。

べつに善意自体を否定したい訳じゃない。

要するに、誰もが助けを求めている訳じゃないんだから無闇に手を差し伸べるのは如何なものかと言いたいんだ。そんなものは最早善意じゃない。単なる自己満足の押しつけに過ぎないものなんだから。

「な　」

案の定、士郎は土蔵の外で行われる戦闘に言葉を失った。

それもその筈。少女は助けなど必要ない程の圧倒的な戦いぶりを見せている。むしろ今この戦いに介入する事は無粋にしかならず。足手纏いの邪魔者にしかなり得ない。

勿論俺もその迫力に吞まれかけた。だが幸か不幸か2度もその脅威に晒された俺は辛うじて堪えきれた。

当然だ。士郎を護るためにも俺が怖じ気づいてはいられない。

「これが英雄か」  
サーヴァント

「サーヴァント？……なあタ兄、そろそろ教えてくれないか。こっ

「ちは何がなんだか分からないんだぞ」

やはり気になるのか士郎が再び訊ねる。

まあいい加減少しくらい説明せねばなるまい。流石にまだまだ戦闘中のサーヴァントたちからは目を離す訳にいかないが。

「つまりおまえは巻き込まれたんだよ。聖杯を巡る魔術師同士の殺し合い　聖杯戦争に」

「聖杯戦争？」

「ああ、ほれ今目にしてんだろ」

「」

士郎がギクリと肩を強張らせる。

人間はどんなに信じ難いことでも目の前に突きつけられたら否定し難くなるものだ。アレ（サーヴァント）らの存在だけは否定出来ない。

それに異常な感知能力に優れた士郎なら本能的に感じられる筈だ。カレらが如何なる存在なのか。

「まあもう薄々分かっていると思うが、彼女を召喚したのが俺たちだ。つまり契約を交わした以上、俺たちが彼女の主人な訳だ<sup>マスター</sup>な」

「さっきの契約ってそういう……！？いや、待て！！夕兄ッ、そんな大事なこと1人で勝手に決めたのかよ！！」

「仕様がねえじゃん。俺もホントはおまえを関わらせたくなんか無かったんだよ。でもマスターに選ばれたからやむを得ずだな……」

「マスター」

最終的に俺の説明に唸り始める士郎の言葉は少女の凜とした呼び声に遮られる。

今までのサーヴァントたちの会話を聞かせてもらった限りでは、原

作同様ランサーが停戦を申し入れたらしい。俺も膠着状態のカレらの様子には気づいていたが、血気盛んな彼女が聞き入れるとは思わず。

彼女から声をかけられた事には驚いた。

「停戦を受け入れるかは貴方がたの判断に従います」

「俺はべつにいいが。士郎は構わないか？」

「いや、俺は状況がよく分かんないし、夕兄がいいならべつにいいよ」

「話の分かるマスターで助かるぜ。おい坊主、名は？」

「衛宮タ士だ」

「そうか。じゃあな、セイバー。次はその心臓貰い受けるぜ」

彼女が俺たちに意見を求めたことにも驚いたが、結果的に止めずにすんだみたいだ。それに、だんたん彼女の違和感が目立ち始めた。少なくともこの少女は原作の彼女セイバーじゃない。べつのルートを経験した彼女か、或いは平行世界の彼女なのかもしれない。

「よ、ご苦労様。君は剣士セイバーでいいんだよな？」

「はい。この身はセイバーのサーヴァントとして現界しています」

「俺の事はタ士と呼んでくれ。こっちは弟の士郎だ。2人共マスターだと呼び難いだろ」

「え、衛宮士郎だ。よろしく。おまえはセイバーでいいのか？」

「分かりました、ユウシ。シロウ、詳しい話は後程おねがいします。今は敵を迎え撃ちます」

「敵って……」

セイバーが屋敷の門の方を睨みつける。

その言葉を受けたからか開けられたままの門の前に人影が現れた。警戒心を露わにするセイバーが戦闘態勢に入るのを俺が制する。

「だいじょうぶ。知り合いだよ、セイバー。敵意があれば結界が反応する筈だ」

「こんばんは、衛宮先輩。私はこのまま戦ってもよかったんだけど。この状況の説明くらいはしてくださるのかしら？」

現れた人影の少女の姿が月明かりに曝される。

だからこそ遠坂凜の微笑みが、凄まじい怒気を孕んでいる事に気がついてしまった。

## 性悪根源

遠坂の反応があんまりにも剣呑だった為、殺し合いを覚悟すべきかと思つた程の凄絶な笑みを浮かべられたが、彼女も何も知らぬ素人同然の士郎に戦いを挑む程外道じゃ無かつたらしい。

事情を話たら今回だけは見逃す事を約束してくれた。しかも、敵の情報を知る為だったのかもしれないが、士郎に聖杯戦争の説明までしてくれたのだから、遠坂もたいがい甘い。

まあ実のところ、俺の最大の懸念はこのまま原作同様に言峰綺礼に会いに行く事だったんだが。勿論、士郎の無知ぶりに呆れつつも視線だけで俺を攻めてくる遠坂が、士郎をそのまま放置する筈もない。結果的に、気づいたら教会へ行く事が決定していた訳だ。

しかし俺も諦める訳にいかず、教会に到着するギリギリまで反論をつづけた。

「遠坂の説明だけで十分じゃないか」

「仕方ないじゃない。貴方の弟さん、全く事の重大さが分かっていないみたいなんだもの。教会には聖杯戦争に詳しい奴がいるわ。それに衛宮君は聖杯戦争の理由について知りたいんでしょ？」

「それはまあ……」

「いいから士郎は黙っている。だいたい、そんなの俺が教えればいい。わざわざ奴のどこに行く必要なんかないね」

「あら、先輩は綺礼と知り合ってたのね。じゃあ衛宮君も？」

遠坂が刺々しい様子で問いかける。

この調子だと、やはり言峰からは何も聞かされていないようだ。事実上、この街を管理している遠坂に俺たちの事を黙っていた言峰に怒るのも無理はない。

「俺はあの教会が孤児院だった事くらいしか知らないぞ。むしろタ兄があそこの神父さんと知り合いだったなんて初耳だ」

「ふうん。貴方の弟への溺愛ぶりは学園でも結構有名だけど……」

魔術の事といい、意外に隠し事がおおいのね」

「人聞き悪い事いうなよ。言峰の事なら訊かれてたら答えたさ。魔術については、極力士郎を危険な世界から遠避けておきたかっただけだ」

「そう……」

心当たりがあつたのか遠坂はそれ以上問い詰める事はしない。

まあ彼女にも妹がいるから人事でもないからかもしれない。その後は教会が見えるまで沈黙が破られることは無かった。

「うわ、凄いな」

沈黙を破ったのは士郎の感歎の声だ。

高台の教会は雰囲気のある如何にも本格的な建物だったのだ。この反応も仕方ない。

以前訪れた事のある俺もこの教会の雰囲気には慣れないのだし。

「マスター、私はここで警戒にあたります」

「分かった。そんじゃ後はよろしく」

「い、いきなり出てくるなよ。結構心臓に悪いぞ、それ」

突然実体化したセイバーが用件だけ告げる。

士郎はいまだにこのいきなり虚空から現れる原理に慣れないらしい。俺も始めは彼女が（……）霊体化出来る事実には驚いたが、この行為自体に差程驚きはない。おそらくこの辺も原作の彼女と違うんだろぐらいの認識だ。

俺たちはその足で礼拝堂に踏み入れた。

「なあ夕兄。そういやこの神父さんっていうのはどんな人なんだ。知り合いなんだろう？」

「知り合いつつう程でもないけどな。だが奴の事はひと言じゃ語れないな。ま、かなり腐った根性している事だけはたしかだぜ」

「そうね。10年来の知人になる私でもいまだにアイツの性格は掴めないもの」

「10年来の知人？それはまた、随分と年季が入った関係だな。もしかして親戚か何かか？」

「いや、あの野郎が遠坂の親父に弟子入りしてたつつう話だし、その関係じゃないか？」

「よく知っているわね。正確にいうとアイツは私の後見人よ。兄弟子にして第2の弟子ってとこね」

おもえば遠坂も気の毒な少女だ。

自分の父親を殺した男が兄弟子の上に、ゆいいつ血の繋がった妹の幸福の願いも叶わず。

そんな真実を知る事もないんだから。

「へえ。にしてもこの神父さん……えーつと言峰とかいう人はこつち側の人だったのか」

「ええ。聖杯戦争の監督役に派遣されたんだもの、バリバリの代行者よ。名前は言峰綺礼。もう10年以上顔を合わせてる腐れ縁ね。」

……ま、出来れば知り合いたく無かったけど」

あの男の人格をある程度知れば当然の発言だ。

むしろ俺は10年もあんな男なんかとつき合えた遠坂を尊敬する。

「同感だ。私も師を敬わぬ弟子など持ちたく無かった」

突然沸いた男の声。

祭壇の裏側から現れたその男が言峰綺礼だった。

「再三の呼び出しにも応じず誰を連れて来たのかと思ったが。……  
フム。彼らのうちの1人が7人目という訳か、凜」

「それが今回かなり特殊みたいでこの兄弟2人ともマスターなのよ。  
片方はてんで素人だから見てられなくて。ついでにアンタたちの  
ルールに従ってマスター登録もしてあげる」

「それは結構。なる程、では彼らには感謝しなくてはな」

真っ直ぐ俺に向けられる視線が鬱陶しい。

こんな風にこの男が嬉しそうな顔をする事を分かっていたから来た  
く無かったのだ。

俺は憎々しげに顔を歪める。

「チツ」

「やはり選ばれたか、衛宮タ士。兄弟がいたことには驚いたが私は  
君たちを歓迎しよう」

自分のサーヴァントに士郎を殺させようとした言峰がよくもぬけぬ  
けと言えるものだ。ランサーを介し俺たちの行動も筒抜けだった筈  
にも関わらずこの飄々とした態度。

この腐った世界で死んだ方が世のためなんじゃないかと思わせる男  
などこの男だけに違いない。

言峰の言葉に殺気立つ俺を遠坂が訝しみ、士郎も俺の殺気に身体を  
強張らせた。忌々しい事だが、ここで何を言っても仕方がないので  
ひとまず殺気を収める。

やはり俺はこの男、言峰綺礼が大嫌いだ。

まあ尤も、この男の本性を知った上でこの男を好きになる人間がい  
ると思えないが。



「ハッ、予言が当たって嬉しいかよ。クソ神父」

「くくっ、予言とは上手い事をいう。しかしおまえは気に入らないようだが？」

「……………」

俺が嫌悪に満ちた視線を向けても言峰の愉悅の笑みが深まるだけ。だが嫌悪せずにいられないのもこの男から感じられる性質故だ。

「貴様が今この瞬間、敵じゃない事がこれ程悔やまれるとはな」

俺は敵である事を知っているからこそ最大限の皮肉を込めてつぶやいた。

## 最凶従者（前書き）

気づけば1ヶ月。お待ちたせしました。漸く最新話更新です。  
早速お知らせしたい事があります。

いままで何度か指摘されました魔剣設定。このいい加減な設定を今回を境に切り捨てる事にしました。

よくよく考えれば、魔眼だけでも十分話は進められますし、十分チートですよ。その事を踏まえ、魔剣設定を使った2話を修正しましたが、特に読み返す必要はないと思います。

それではこれからもよろしく願います。

## 最凶従者

俺たちがアインツベルンのマスターことイリヤの襲撃に遭ったのは、言峰による聖杯戦争の説明を受けた後だった。

イリヤのサーヴァントは原作同様バーサーカー。今はセイバーが俺たちの安全を確保する為に教会近くの墓地へと誘導している。

イリヤを説得しようにもそんな余裕もない。それ以前に最強の従者と自負するバーサーカーを従えるイリヤが、わざわざ説得に応じる筈がない。

「アハツ、無駄だよ。わたしのバーサーカーは最強なんだもの。どんな場所にかえようと意味なんてないんだから」

たしかに。原作を知っている俺でも対峙した彼の英雄の桁違いの威圧感に顔を顰める程だ。

バーサーカーは文字通り「最強」の英霊。無論、充分承知している俺が逃げずに、この戦いの渦中に残った事にも理由がある。俺が意味もなく士郎を危険に晒す筈がない。

状況が状況だけに逃げる訳にはいかないのだ。俺たちの居場所は少なくとも言峰にはバレている。仮に今サーヴァントを連れずに逃げ出してもした場合、その滑降の状況下を狙われない敵がいる訳がない。あっさり殺されてしまうのがオチ。

つまりこの場にいるよりも更に死亡率が上げる事になる訳だ。

「ま、なんにしろ俺たちが出る幕はないな」

ぶつかる斧剣と不可視の剣。拮抗する剣戟。次々に破壊され、吹き飛ぶ墓石と決れる大地。

いまの俺たちに来る事と言ったら、凄まじい戦いの余波に巻き込

まれないように気をつけている事くらいだ。

「

！」

戦況的にも地の理を生かしている彼女が有利。

容易く風払われる墓石や木々を見れば、バーサーカーの凄まじさは分かるかもしれないが、その力は生かしきれなければ意味はない。せいぜい俺たちは逆に彼女の邪魔をしないように務める事だ。しかし実際に危険が迫った時に咄嗟に動けるかは別の話。

遠坂が飛んでくる墓石の欠片を避けられずに固まってしまった。

「遠坂、危ないッ！！」

「あ　？」

その様子を見かねた士郎が本来なら大怪我を負っていた筈の遠坂を士郎が抱き込んだ。

この行動に慌てたのは他ならぬ俺だった。

「おいおい気をつけろよ、遠坂！！士郎、怪我はないか！？」

「俺は問題ないよ。それより遠坂はだいじょうぶなのか？」

「私はあるたのおかげでなんともないけど……」

「そうか。よかった。俺も役に立つだろ？」

「ッ」

顔を赤くする遠坂を他所に安堵の息を吐く士郎。

2人の様子には流石の俺も目が据わる。突然見せつけられたラブコメに砂を吐きたくなる思いだ。

士郎には魔術師がどんなものをしつこく説明した筈なんだが。いまだに士郎の魔術師にたいする認識は甘い。この分だといくら遠坂が魔術師だといっても士郎は敵対する事など考慮にいれていないに

違いない。

「ていうかこんな戦いになったらそんな問題じゃないわよ。相手はアーチャーの矢さえ無効化する怪物だもの。私たちの援護なんて始めっから通用しないのよ」

「……アーチャーの、矢……」

その時、士郎の無意識のつぶやきと共に遠くから膨れ上がる魔力、濃密な殺気を感じた。

アーチャーがバーサーカーをセイバー共々殺すためにか宝具を解放する。これは俺の単なる推測でしかないが、士郎が彼女を庇いに来る事を確信しているが故の行為かもしれない。

カレもエミヤシロウだ。何の躊躇いもなく彼女を殺せるなどとは思わないし、衛宮士郎（自分自身）の行動パターンを知り尽くしている筈なのだから。

「セイ」

「こらこら、待たんか」

「つつわあ!？」

アーチャーの思惑に気づいた士郎が駆け出す前に襟首を掴まえ、遠坂のいる方に引っ張り戻す。

士郎を押し退け、俺が彼女の下に走る。

「俺が行く。おまえは遠坂の傍にいろ」

「なッ、夕兄!？」

念話で知らせる手段もあったが、そんな事をしていたら間に合わない。幸い彼女の斬撃があたったのか狂戦士が丁度バランスを崩した。

その隙に強化した体と元々脅威的だった身体能力で驚く彼女を抱きかかえ跳び退く。

次の瞬間、背後で大気を揺るがす程の大爆発がおこった。あたりいつたい炎につつまれる。

「……！！」

「……バーサーカー……ランクAに該当する宝具を受けて尚無傷なんて」

それでも尚堪えた様子のないバーサーカーに史実を知る俺までも実際に目にした衝撃からか啞然する。

正に最強たる力を示している彼の大英雄。その従者の主たるイリヤが余裕なのも頷ける。

その底知れぬ自信の意味を俺たちは今漸く理解したのだ。

それもランクB以上の攻撃じゃなければ、効果がない上におなじ攻撃が効かない規格外。

「こりゃあ、いくらなんでもバケモノにも程があるだろ。1回くらいは死んだんじゃないか？」

「助けていただいた事には感謝しますが。そろそろ下ろしてもらえませんか、ユウシ。……ユウシ？」

思わず冷や汗をかいてつぶやいた俺をセイバーが訝しげに見上げる。今の攻撃はランクAに該当する威力だった筈。

少なくとも無傷なのはおかしい。これは再生したとかんがえた方がいいようだ。

「おいイリヤ。ソイツの真名はヘラクレスだろ。宝具は12の試練<sup>ゴッドハンド</sup>。いまのも自己蘇生したんじゃないか？」

「へえ。よく分かったね、お兄ちゃん。そうよ。其処にいるのはヘ

ラクレスっていう魔物。アナタたち程度が使役出来る英雄とは格が違う。最凶の怪物なんだから」

真名がバレても全く臆する気配のないイリヤ。

むしろ戦いを愉しんでいる節すらある。それは幼い子供が蟻の行列を無邪気な好奇心で踏み潰す残酷さにも似ていた。

「それにしても見なおしたわ、リン。やるじゃない、アナタのアーチャー。いいわ。戻りなさい、バーサーカー。つまらない事は早めにすまそうと思ったけど。少し予定が変わったわ」

「なによ。ここまでやって逃げる気？」

「ええ。気が変わったの。アナタのアーチャーには興味が沸いたわ。だから暫く生かしておいてあげる」

「おう、帰れ帰れ。んなバケモノと好き好んで戦いつづけたいつつう馬鹿なんざいねえからよ」

俺のこの発言は軽い厭味だったんだが、イリヤがほんのわずかに寂しげな顔をした気がする。

だがそんな表情も見間違いだったのか、イリヤはいつもの不適な笑みを浮かべ、まるで幻影だったかのように炎の向こうへ去っていった。

「それじゃあ、バイバイ。今日は中々愉しめたわ。また遊ぼうね、お兄ちゃん」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1407n/>

---

運命邂逅

2011年11月13日22時06分発行